山口県埋蔵文化財調査報告　第162集

明地遺跡

みょうぢ

― 平成４年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告 ―

1993

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

山口県では、活力に満ちた地域社会の実現にむけて、農業基盤整備事業をはじめとする様々な諸施策が推進されており、また、住みたくなるふるさとを創造し、生き甲斐のある県民生活を築くために、豊かな文化環境づくりが進められております。

㈶山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営圃場整備事業に伴う工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、開発と文化財保護の調和のとれた県土づくりをめざして、埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

本書は、県営圃場整備事業に伴う明地遺跡の発掘調査報告書です。この報告書が、山口県の歴史を学ぶ上で、また埋蔵文化財をより深く理解していただく上で、ご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申しあげます。

平成５年３月

㈶山口県教育財団　理事長　高山　治

山口県教育委員会　教育長　高浜　哲

例　言

1　本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成４年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、田布施町大字大波野字荒木に所在する明地遺跡の発掘調査に係る埋蔵文化財調査報告書である。

2　調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団（理事長　高山　治）
　　山口県教育委員会　　（教育長　高浜　哲）
事 務 局　財団法人山口県教育財団（事務局長　津田　信行）
　　山口県教育委員会文化課（課　長　山田　泰久）
　　（係　長　乗安和二三）
調査担当　「総括」山口県埋蔵文化財センター（所長　中村　徹也）
　　（次長　樫部　裕人）
　　（主任　村岡　和雄）
「調査員」財団法人山口県教育財団事務局指導主事　土井　勉
　　同　　中野　達之
　　山口県埋蔵文化財センター文化財専門員　岩崎　仁志
「援　助」山口県埋蔵文化財センター職員

2　調査の実施に当り、山口県農林部耕地課、山口県柳井土地改良事務所、田布施町教育委員会及び地元関係各位から多大なる協力を得た。

3　本書の作成に当り、石材鑑定については山口県立山口博物館専門研究員　亀谷敦氏に指導、助言を頂いた。記して謝意を表す。

4　本書に掲載した第１図の地形図は建設省国土地理院発行の25,000分の１の地図「柳井」を複製したものである。また、第２・３図の地形図は山口県柳井土地改良事務所の提供によるものである。

5　本書に使用した方位は、すべて国土座標（第３座標系）で示し、標高は海抜標高である。

6　図版中の遺物番号は、実測図中の遺物番号と対応する。

7　本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

ＳＢ：住居　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　ＳＴ：埋葬遺構

8　本書で使用した土色や土器の色調の表記はMunsell h 方式によった。

（農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」）

9　本書の作成・執筆は、中村の指導・助言を得て、岩崎（Ⅲ－３・Ⅳ・Ⅴ）、中野（Ⅰ・Ⅱ）、土井（Ⅲ－１、２、４）が分担作成し、土井が編集した。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の経緯と概要 …… 2
Ⅲ　遺構 …… 4
(1)　竪穴住居 …… 4
(2)　土坑 …… 11
(3)　墓 …… 13
(4)　その他の遺構 …… 16
Ⅳ　遺物 …… 17
(1)　土器 …… 17
(2)　石器・石製品 …… 20
(3)　土製品 …… 21
(4)　鉄器 …… 23
(5)　玉類 …… 24
Ⅴ　まとめ …… 25

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
第２図　遺跡周辺の地形 …… 3
第３図　調査区設定図 …… 4
第４図　遺構配置図 …… 折り込み
第５図　竪穴住居実測図① …… 6
第６図　竪穴住居実測図② …… 7
第７図　竪穴住居実測図③ …… 8
第８図　竪穴住居実測図④ …… 9
第９図　竪穴住居実測図⑤ …… 10
第10図　土坑実測図 …… 12
第11図　墓実測図① …… 13
第12図　墓実測図② …… 14
第13図　墓実測図③ …… 15
第14図　墓実測図④ …… 16
第15図　土器実測図① …… 18
第16図　土器実測図② …… 19
第17図　土器実測図③ …… 20
第18図　土器実測図④ …… 21
第19図　石器・石製品実測図 …… 22
第20図　土製品実測図 …… 23
第21図　鉄器実測図 …… 24
第22図　管玉法量分布 …… 24
第23図　玉類実測図 …… 24
第24図　住居・墓分布模式図 …… 25
第25図　明地遺跡調査区と遺物包含層確認地点 …… 26
第26図　古柳井水道想定図 …… 26
第27図　遺物包含層確認地点土層図 …… 26

表目次

第1表 竪穴住居一覧表 …… 5　　第2図 土坑一覧表 …… 11

図版目次

図版1　明地遺跡全景（北上空から）　明地遺跡全景（南上空から）

図版2　遺跡完掘（真上から）　遺跡完掘（住居群）

図版3　ＳＢ31　ＳＢ02　ＳＢ22　ＳＢ21

図版4　ＳＢ09　ＳＢ18　ＳＢ13　ＳＢ13土器出土状況

図版5　ＳＢ24　ＳＢ27　ＳＢ17　ＳＢ32

図版6　ＳＢ34　ＳＢ34炉跡　ＳＢ16　ＳＢ30

図版7　ＳＫ09　ＳＫ01　ＳＫ07　ＳＴ07検出状況　ＳＴ07完掘
　　ＳＴ07分銅形土製品出土状況

図版8　ＳＴ10　ＳＴ10管玉出土状況　ＳＴ08　ＳＴ12　ＳＴ09

図版9　ＳＴ14　ＳＴ05　ＳＴ02　ＳＴ04　ＳＴ11　ＳＴ15
　　遺物包含層確認地点1　遺物包含層確認地点2

図版10　出土遺物①

図版11　出土遺物②

図版12　出土遺物③

図版13　出土遺物④

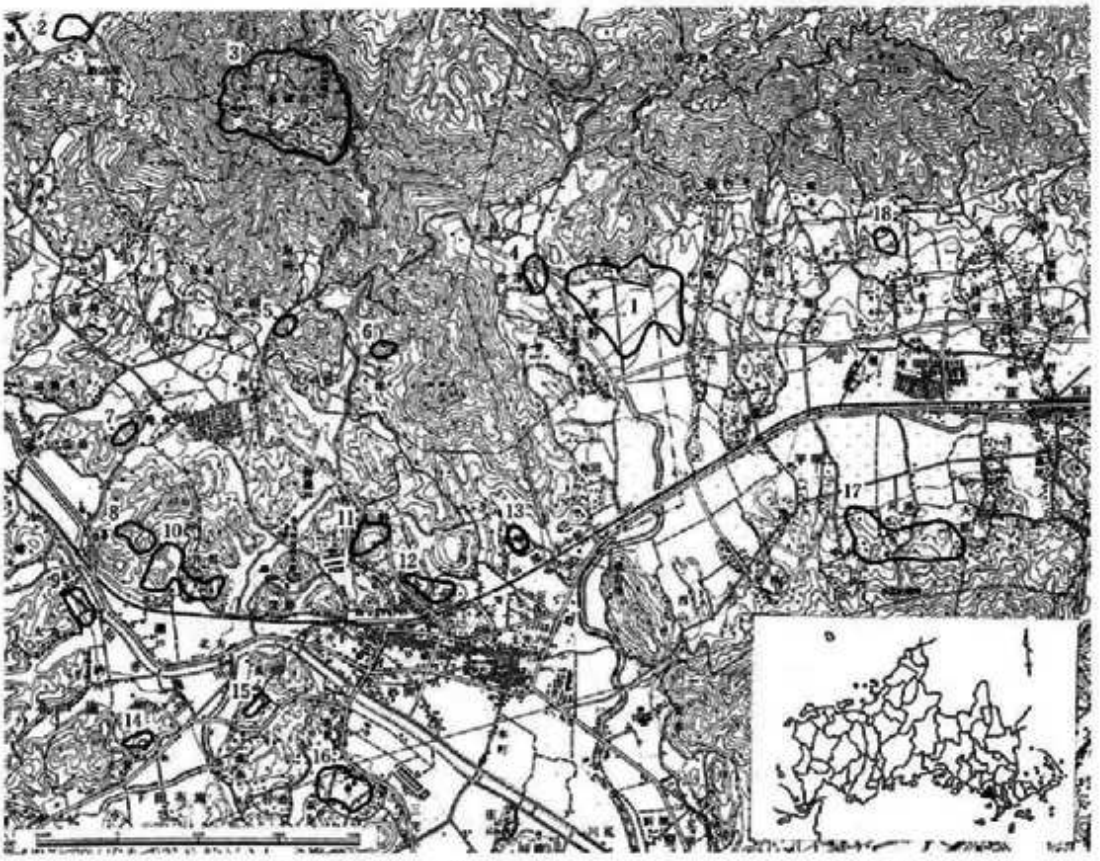
図版14　出土遺物⑤

Ⅰ　遺跡の位置と環境

明地遺跡は、弥生時代中期から古墳時代初期の集落跡および中世の溝・柱穴群から構成される複合遺跡である。行政上は熊毛郡田布施町大字大波野に所在する。田布施町は、山口県東南部熊毛半島の基部に位置し、光市・大和町・柳井市・平生町と境を接している。

遺跡は、北西側に神籠石で知られる石城山（標高350m）、北東に大平山（標高316m）、西に行者山（標高194m）、南に赤子山（標高230m）など、周囲を花崗岩を主体とするなだらかな山地に囲まれており、東西に延びる柳井低地北西端の微高地に位置している。

柳井低地は、柳井市新庄・古開作から田布施町大波野に至る低地帯で、標高の低い部分の地層に青灰色砂泥層が確認され、周辺には大波野・波野・砂田・浜・海田などの地名が存在していることなどから古柳井水道とも呼ばれ、最大海進期には海面化していたことが推定される。また、この低地帯の北側山麓帯及び南側山麓帯には、南北方向に洪積台地が櫛歯状にのびている。特に北側の大平山山麓の洪積台地は平坦地が広く緩傾斜をなしている。これらのことから



1　明地遺跡	5　宝前遺跡	9　国森遺跡	13　尾崎遺跡	17　赤子山山麓遺跡
2　三鍛冶屋遺跡	6　平井遺跡	10　竹部遺跡	14　西才賀遺跡	18　濡田廃寺跡
3　石城山神籠石	7　時貞遺跡	11　長合第２遺跡	15　長田遺跡	
4　天王原遺跡	8　後井古墳群	12　長合遺跡	16　神過原遺跡	

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡周辺は南側に穏やかな入り江をひかえ、北側に台地及び山地を有しており、海による漁撈や背後の山地における狩猟、採集が可能であり、集落の立地に好条件であると推考できる。

周辺の遺跡を概観すると、弘津史文編「周防國熊毛郡上代遺跡遺物発見地調査報告書」及び「防長石器時代資料」に手づくね土器・甕・壺などの土器や磨製石斧が紹介されている本遺跡のほか、奈良二ツ池遺跡や天王原遺跡・長合遺跡・開明遺跡・宝前遺跡などの弥生時代の遺跡が点在している。また隣接する平生町には弥生時代終末期の典型的な高地性集落跡である吹越遺跡、またその麓の台地上に立地する松尾遺跡などがあげられる。これらの弥生時代の集落の発達が基盤となり、続く古墳時代には国森古墳・神花山古墳・柳井茶臼山古墳・白鳥古墳・後井古墳など特質ある古墳が次々と築造され、周防熊毛地方は、更なる発展を遂げる。以上のように田布施・柳井地域は県下屈指の遺跡密集地帯であるにもかかわらず、本格的な集落の発掘調査が行われておらず、まとまった資料に乏しい地域であった。このような意味でも今回の発掘調査は非常に資料的価値の高いものである。

参考文献

弘津史文　『周防國熊毛郡上代遺跡遺物発見地調査報告書』山口高校郷土史研究会　1927

弘津史文　『防長石器時代資料』山口高校郷土史研究会　1929

山口県　『土地分類基本調査―柳井・室津・青島―』山口県　1979

山口県教育会『山口県百科事典』大和書房　1982

小野忠熙　『山口県の考古学』吉川弘文館　1985

小野忠熙　『日本の古代遺跡　30　山口』保育社　1986

坪井清足　『発掘が語る日本史―第五巻中国・四国編―』紀行社　1986

下中邦彦　『山口県の地名』「日本歴史地名大系」平凡社　1990

田布施町　『田布施町史』ぎょうせい　1991

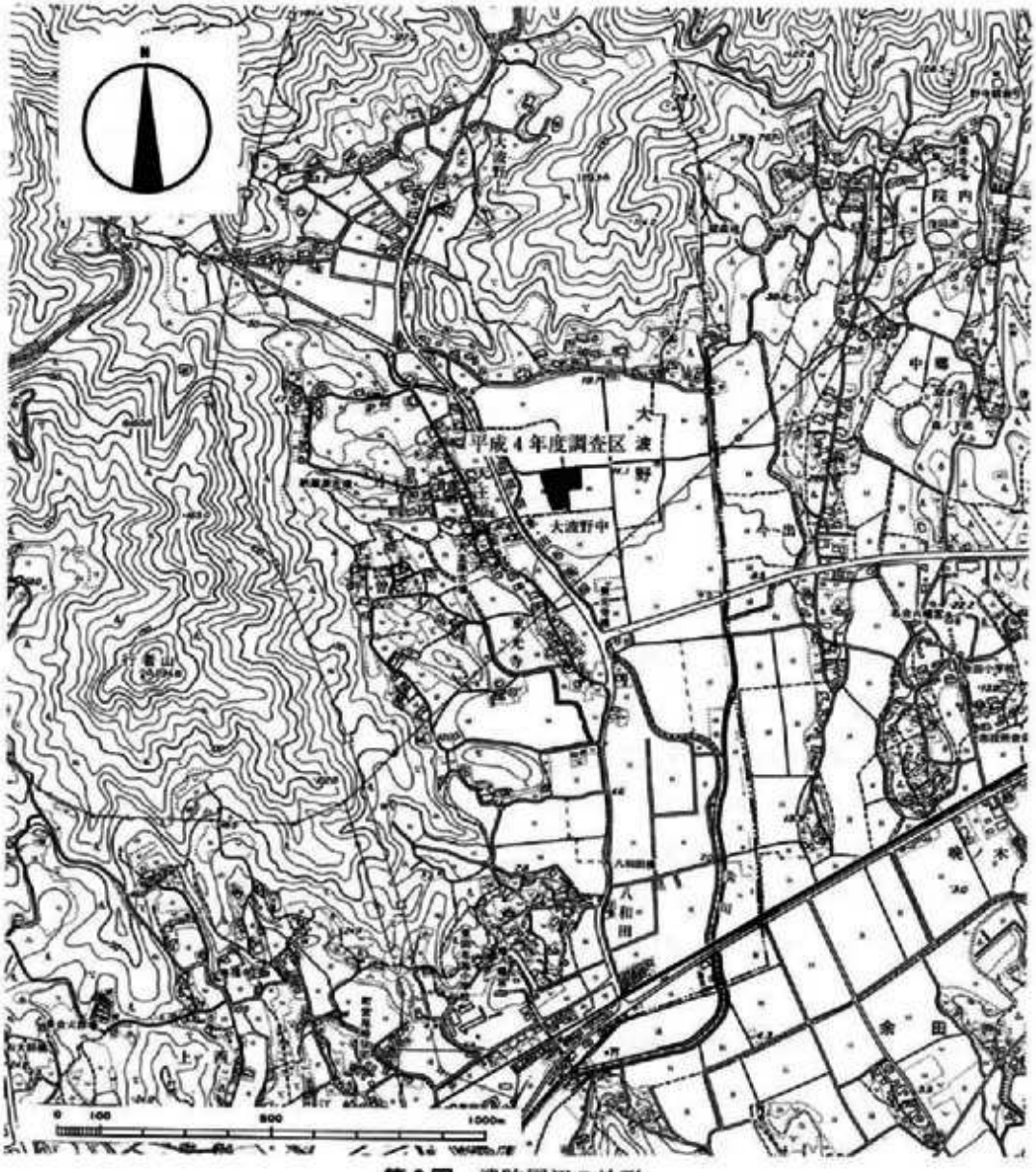
Ⅱ　調査の経緯と概要

県内各地で進められている県営圃場整備事業は農業生産の基盤を整えるものであるが、同時に地下の貴重な埋蔵文化財を破壊する可能性も高い。山口県教育委員会では、県営圃場整備事業対象区内の埋蔵文化財保護のため、あらかじめ遺跡の分布調査を行う。確認された遺跡については現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存の困難な遺跡については事前調査の後、詳細な記録保存を行うようにしている。

明地遺跡のある灸（やいと）川下流域は県営圃場整備大波野地区（第三換地区）になっており、地下の埋蔵文化財の破壊が懸念されるため、当該地域の中で遺構の埋存の可能性の高い地区について平成３年12月９日から３日間、事前調査を実施した。この事前調査の資料をもとに県農林部耕地課と協議を行い発掘調査の対象となる範囲を確認設定した。調査にあたっては財団法人山口県教育財団が県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受

け、両機関が合同で発掘調査を行うこととなった。

平成４年４月現地における地権者等関係諸機関との打ち合わせを行った後、同月20日から発掘調査を開始した。まず地層及び遺構の分布を把握するため、事前調査の資料をもとに対象地区の外郭部に数本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、遺構の分布密度の高い箇所を中心に調査面積を約6000㎡に絞り込み、重機によって遺構面上に堆積している耕土、盤土を除去した。さらに人力による精査を行い各遺構を検出した。調査地区の南端については包含層が厚く堆積しているため２ｍ方眼のグリッドを設定し、１区画ごとに掘り込んだ。調査の結果、調査地区の北側から中央部にかけて弥生時代～古墳時代の住居跡を多数検出したほか、調査区南側を中心に広がる土坑を検出した。また住居跡の周辺に点在する土器棺墓や数基の土抗



第２図　遺跡周辺の地形

第3図　調査区設定図（アミ掛け部）

墓も検出した。以上、各遺構の検出及び掘り込みを実施した後、写真撮影・遺構実測を随時すすめていった。発掘調査の概要については、8月29日に現地説明会において発表し、多数の見学者を集めることができた。9月3日、遺跡全域の空中写真を撮影し、同月11日現地におけるすべての調査を終了した。

Ⅲ　遺構

弥生時代から古墳時代にかけての遺構を中心に述べることにして、中世の遺構については確認されたものが少なく、また、紙面の都合上割愛することにした。

(1)　竪穴住居

今回の調査で確認された円形竪穴住居跡は24軒、方形竪穴住居跡は10軒の計34軒である。調査区の北半から大部分が検出された。時期的には弥生時代後期前半から古墳時代中期に渡るが削平の著しい部分があり、既に幾棟かの竪穴住居跡が消失している可能性がある。概要については、第1表（竪穴住居一覧表）にまとめた。以下、代表的な住居跡について簡単に紹介する。

ＳＢ31（第5図、図版3）　Ⅱ区の西端に位置する。2本柱の円形竪穴住居跡で本遺跡最小の床面積で約7㎡である。自然石が壁面沿いの床から出土した。おそらく作業台として利用されたものであろう。埋土は黒褐色弱粘質の単一土である。

ＳＢ02（第5図、図版3）　ベット状遺構が北側一部を除き、ほぼ全壁面を巡る。最大幅は125㎝、高さ12㎝を測る。周溝が南壁面に検出された。中央穴から叩き石、床面から砥石、叩き石が出土した。埋土は黒褐色弱砂質の単一土である。

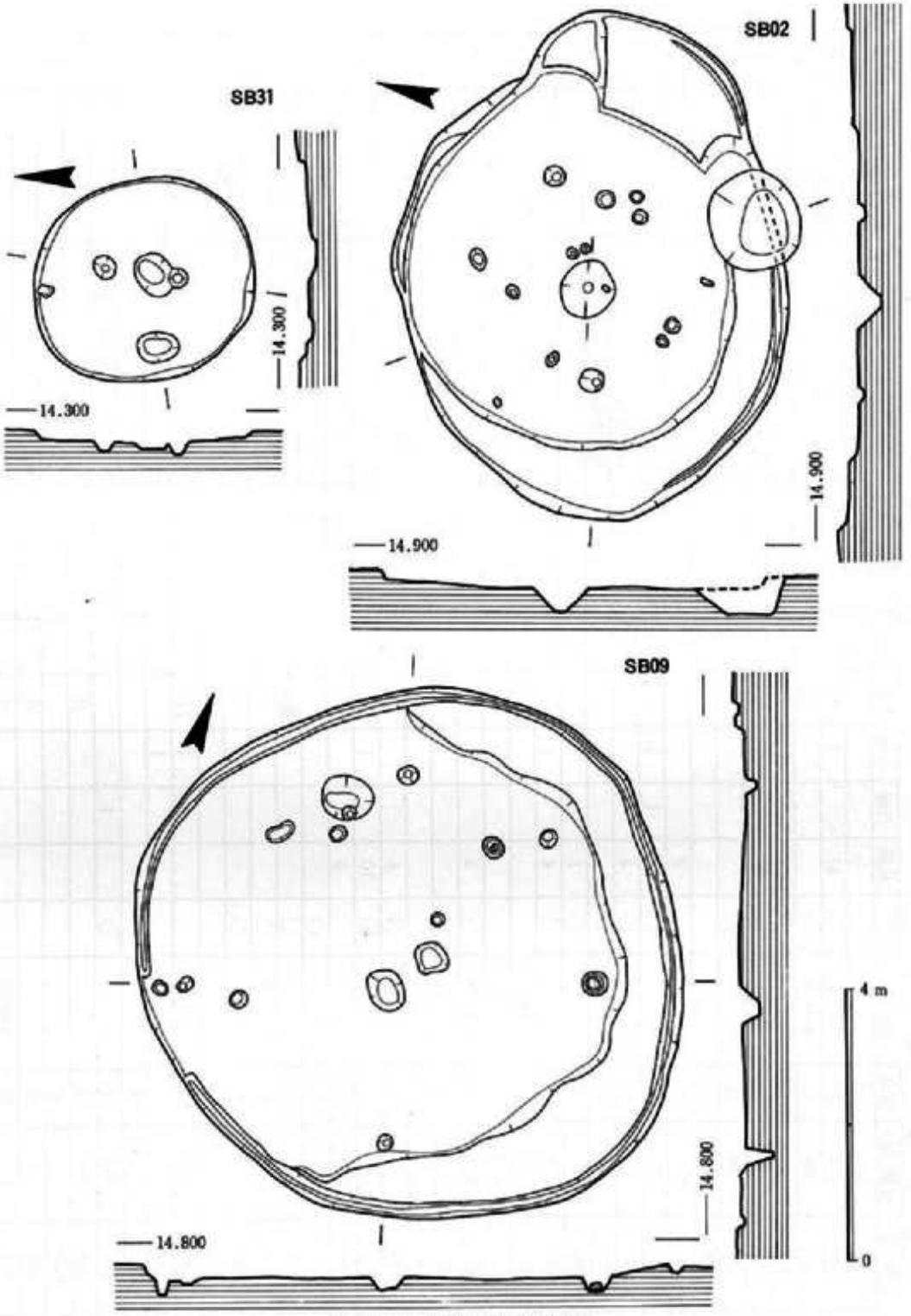
ST14
SK26
SB34
SB30
SD01
SB32
SB33
SB31
Y=-9750
Y=-9770
Y=-9790
Y=-9810
Y=-9830
X=-224890
X=-224910
X=-224930
X=-224950
X=-224970
ST01
ST04
SB18
SB17
ST02
ST06
ST05
SB23
SB24
SB21
SB05
SB19
ST03
SB22
SB20
SK06
SB09
SB13
SB16
SB04
SB03
SB10
SK07
SK01
SK05
SB12
SB14
SB15
SB08
SB11
SB02
SB07
SK04
SK03
SB06
SB01
SK02
ST09
ST11
SK25
ST13
ST07
ST10
SK21
ST12
SK13
SK24
ST08
SK12
SK23
SK11
SK22
SK15
SK17
SK08
SK14
SK18
SK10
SK16
SK09
SB28
SK19
SK20
SB26
SB29
SB25
SB27
I区
0
40m

第4図　遺構配置図

第1表　竪穴住居一覧表

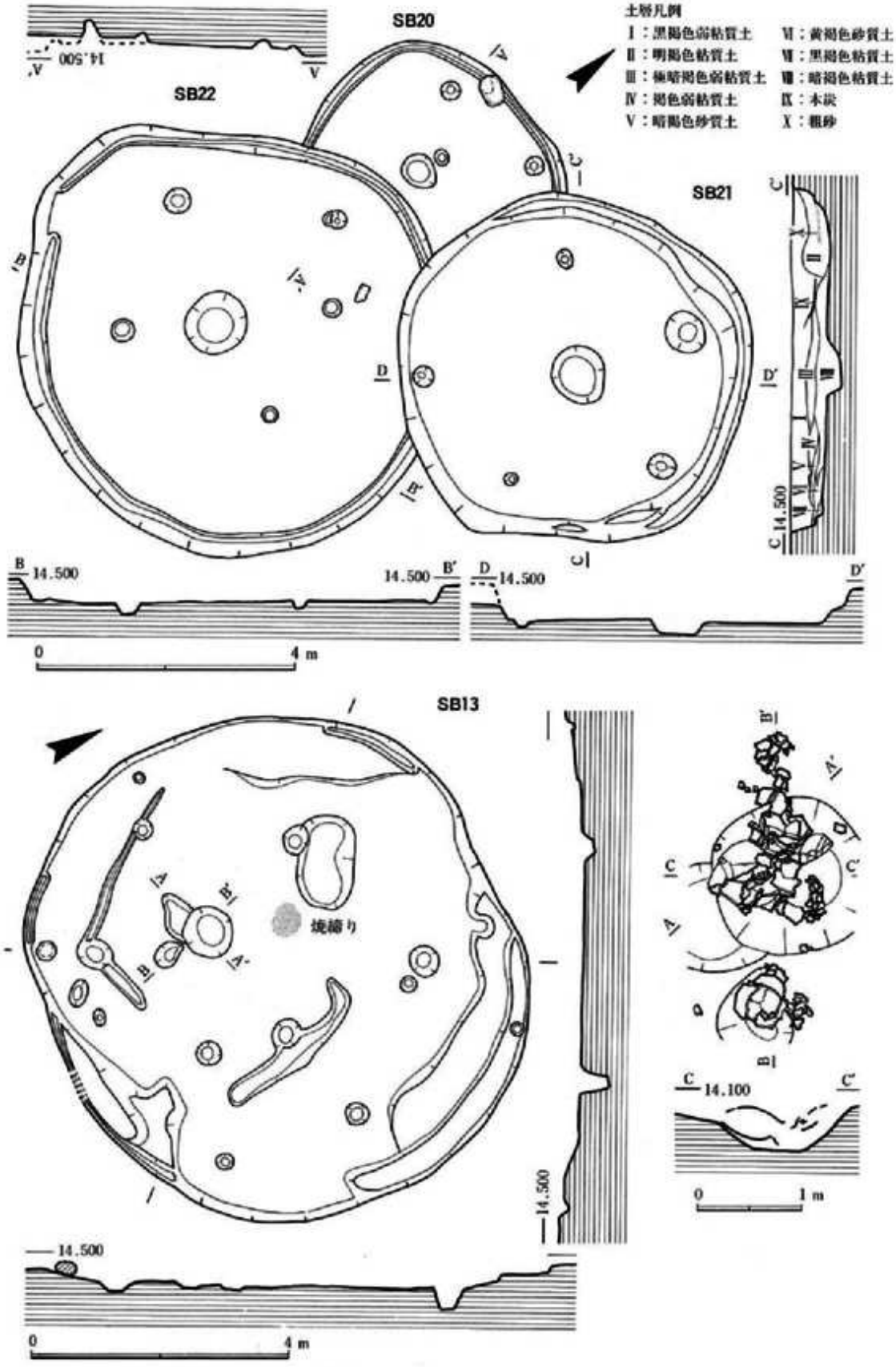
遺構番号	平面形	規模 cm 長軸(径)	規模 cm 短軸(径)	規模 cm 壁高	軸方位 長軸を基本	周溝	主な遺物 石鏃	石錘	土錘	鉄器	管玉	ミニチュア土器	その他	備考	時期
01	円形	764	598	8		○	5						算盤玉状土製品 軽石		B
02	円形	780	570	27	N70°E	○	12		1	片				植物種子	A
03	方形	392	384	11	N84°E	○				石突		2			B
04	円形	782	—	9		○						1			A
05	円形	558	540	9		○	2	1		片			土製支脚		A
06	円形	558	538	15		○						1			B
07	方形	580	—	16	N89°E										D
08	円形	780	592	23			2						土製勾玉		A
09	円形	830	780	15		○	56	1	1	片	5		石錐		B
10	円形	900	—	14		○	4						石庖丁片		B
11	円形	750	—	14						片		1	用途不明土製品		A
12	円形	796	—	9		○	1				1				B
13	円形	780	728	32		○	4		1						B
14	方形	500	345	—	N34°W										(D)
15	方形	423	400	—	N 9°W										(D)
16	方形	430	408	25	N33°W		3		1						D
17	隅丸方形	580	570	40	N57°E										C
18	円形	790	700	42									分銅形土製品	炭化米	B
19	円形	544	—	14		○	1			刀子					A
20	円形	422	—	12		○	10		1			1			B
21	円形	560	556	53			3			片	2	2		植物種子	B
22	円形	730	674	37		○									A
23	円形	844	686	36		○			1	鎌・鉋					C
24	方形	552	536	26	N30°W	○									B
25	円形	740	—	27		○			1					植物種子	B
26	円形	918	—	28											B
27	隅丸方形	510	500	64	N14°E				1	刀子					C
28	円形	530	434	19					1						B
29	円形	498	—	24											D
30	方形	376	360	9		○		1				1	ガラス小玉 用途不明土製品		D
31	円形	318	290	14						片					A
32	六角形	640	—	39											C
33	円形	562	—	20						片		1	異形土製品		B
34	方形	474	446	43	N18°W					片					C

時期記号　A—弥生時代後期前半　B—弥生時代後期後半　C—古墳時代前期　D—古墳時代中期



第5図　竪穴住居実測図①

ＳＢ09（第５図、図版４）　６本柱の円形竪穴住居跡で、床面ほぼ中央に２基の炉跡を確認する。周囲に断面Ｕ字形の周溝を巡らし、東半にはベッド状遺構を有する。埋土から石鏃、石材が多量に出土したことから、工房的な性格の強い住居跡と考えられる。出土した管玉５点に

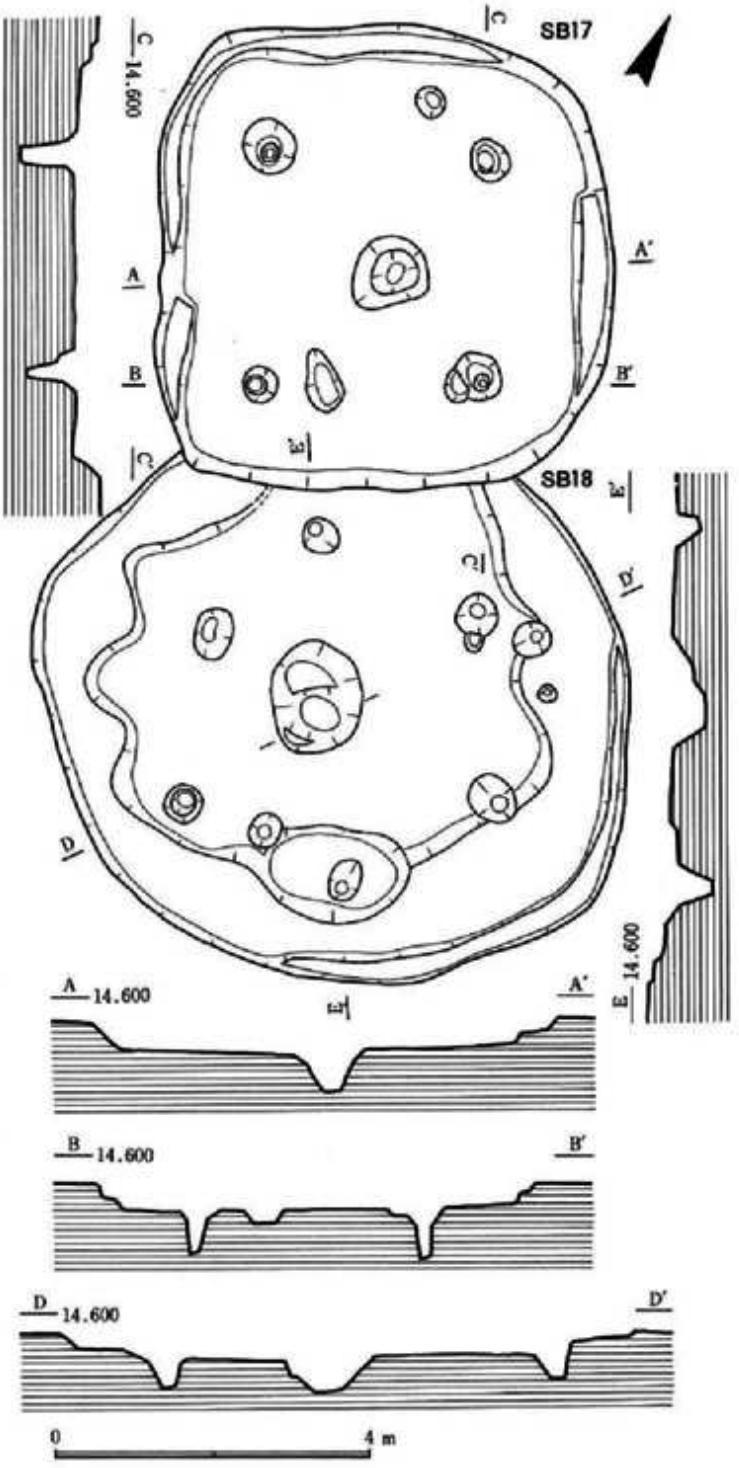


第6図　竪穴住居実測図②

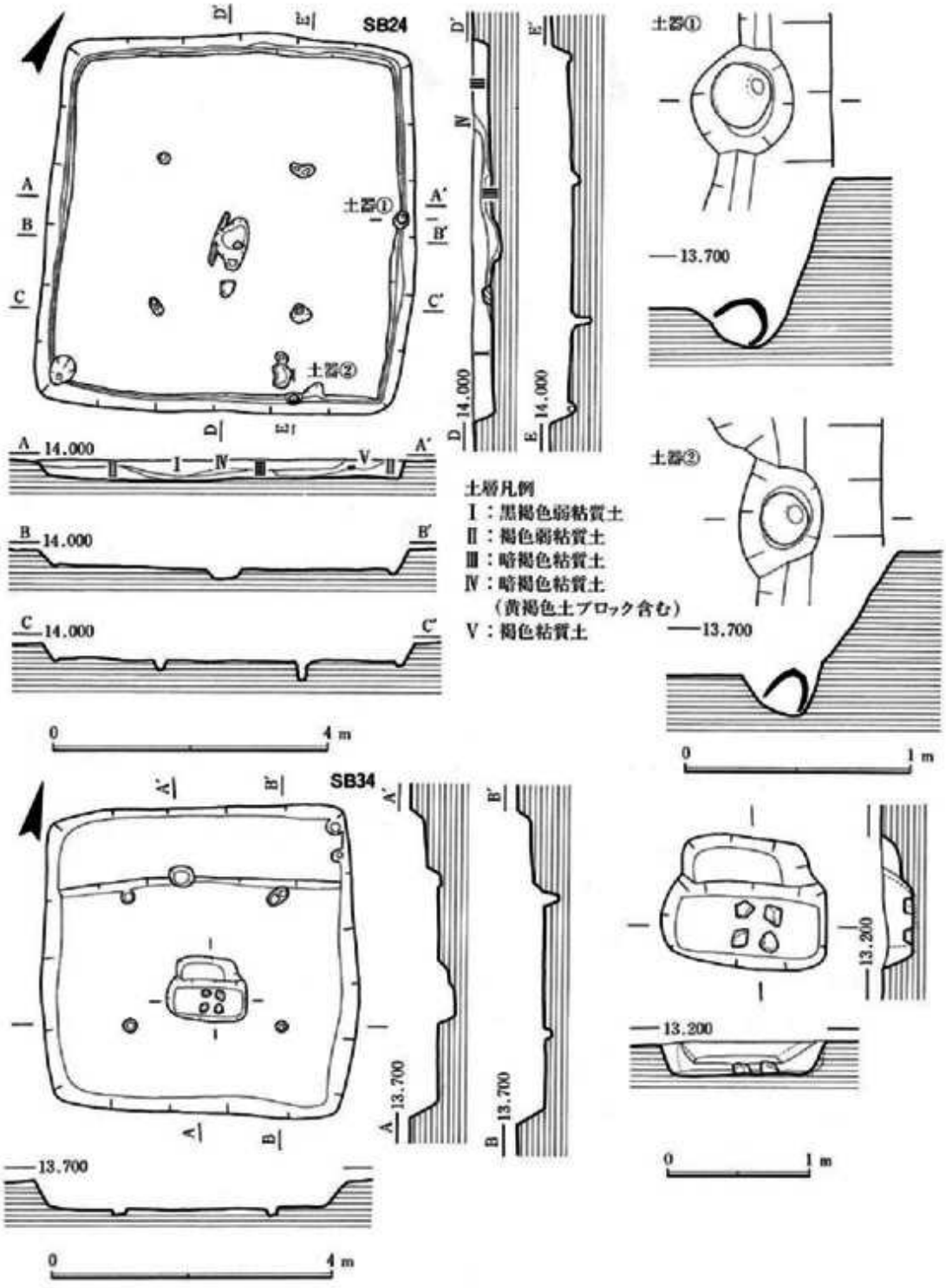
はすべて熱をおびた痕跡があり、火災を受けた可能性がある。埋土は基本的には黒褐色弱粘質土の単層であるが、ブロック状に明褐色粘質土が混入している。

ＳＢ21、22、23（第６図、図版３）　20、22は４本柱、22は５本柱の円形竪穴住居跡である。20、21については先後関係は不明である。22は床面の形状、出土遺物から、22は20、21に切られていることが確認できた。22の周溝より赤色顔料の入った鉢が出土した。21の埋土中層には焼土が認められた。

ＳＢ13（第６図、図版４）　柱穴が不規則に並び中央に焼締まりがある。その北寄りには長円形の土坑が検出された。その土坑の埋土には焼土と炭化物が混入していることから炉跡と考えられる。周溝の一部とみられる溝や一部２段になっているベッド状遺構が検出された。中央やや南側の小土坑からは壺（第16図19）、甕（第16図20）が置かれたような状況で出土したが、壺の底部と口縁部は離れた位置で検出された。埋土は黒褐色弱粘質の単一土である。

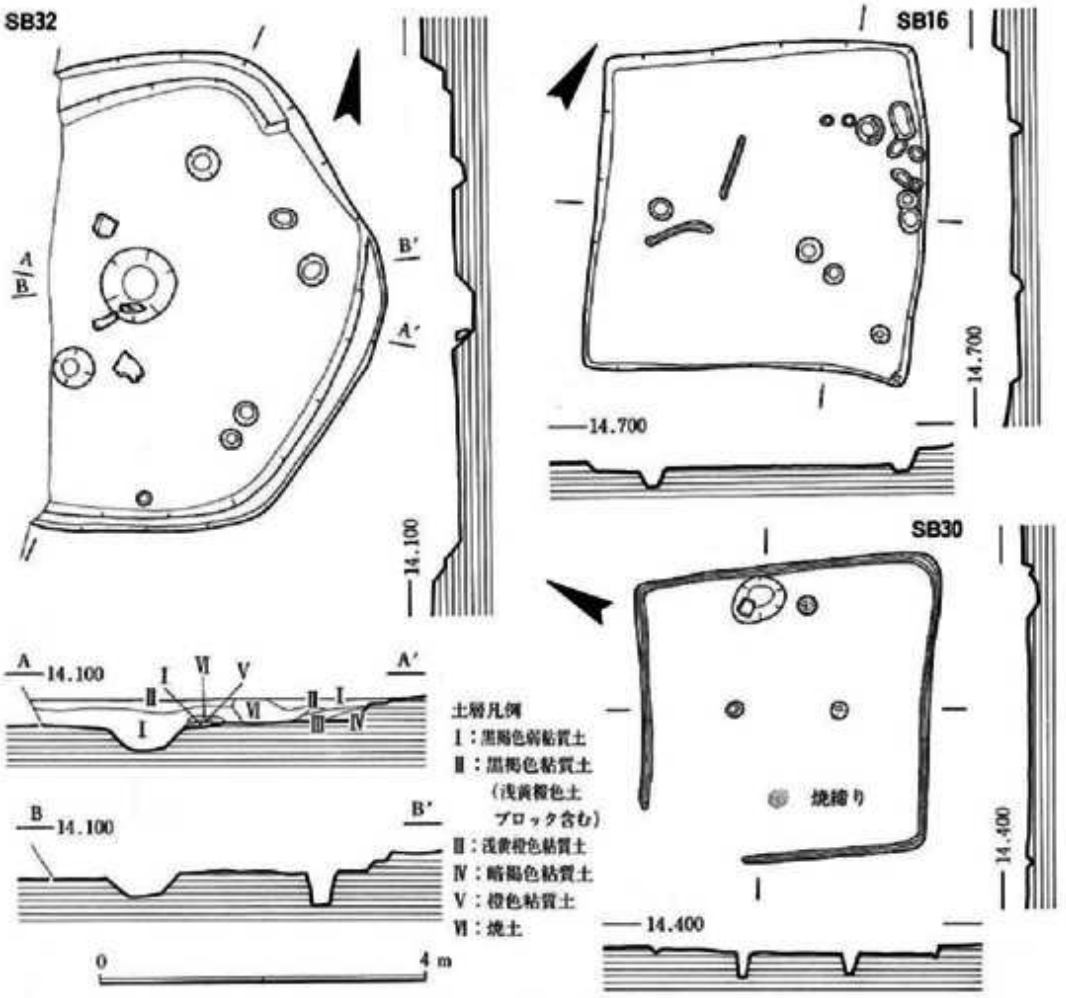


第７図　竪穴住居実測図③



第8図　竪穴住居実測図④

ＳＢ17、18（第７図、図版４・５）　17は柱穴間約2.8ｍの４本柱の隅丸方形竪穴住居跡である。狭い段状の部分が南側を除いて３方向に位置している。18は炉跡を中心に置く６本柱の円形竪穴住居跡である。ベッド状遺構が全周を巡っている。遺存状況は良好で、切り合いは17



第9図　竪穴住居実測図⑤

が18を切っており先後関係は明白である。

ＳＢ24（第８図、図版５）　４本柱の方形竪穴住居跡で、周溝が全周を巡る。東・南側の周溝内より小鉢が伏せた状態で出土した。主柱穴の径が小さく、中央穴のそばには浅い溝状の堀り込みがある。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

ＳＢ34（第８図、図版６）　Ⅱ区南端に位置する。４本柱の方形竪穴住居跡である。床面北側にはベッド状遺構がある。床面中央には２段に掘り込まれた炉跡があり、支脚の役割をしたであろう拳大よりやや大きめの自然石４個が遺存した。埋土は黒褐色弱粘質土の単層に円形状の径４～５㎝の明黄褐色粘質土が混入する。

ＳＢ32（第９図、図版５）　西側壁面は調査区外のため明確ではないが、６角形の住居跡と考えられる。主柱穴は６個であると思われる。埋土は黒褐色弱粘質の単一土で、焼土を多く含んでいた。

ＳＢ16（第９図、図版６）　柱穴が多数検出されたが、パターンが不明確であり主柱穴を判別できない。床面に長さ約85㎝、幅約７㎝の浅い小溝が異なる方向に２条あり、居住空間を仕

切るものか排水溝なのか、その意味・性格は不明である。北側壁面に接し床面より約10cm高い棚状の段差をもうけたところに、椀、高坏、甕が横一列に整然と並んで出土した。祭祀の痕跡を留めていると思われる。埋土は黒褐色弱粘質土の単層にブロック状に明褐色粘質土が混入する。

ＳＢ30（第９図、図版６）　２本柱の方形竪穴住居跡である。全体的に床面近くまで削平を受けている。東側の壁際には土坑があり、その南側には意図的に伏せたと思われる高坏の坏部が遺存した。西側には焼締まりが見られた。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

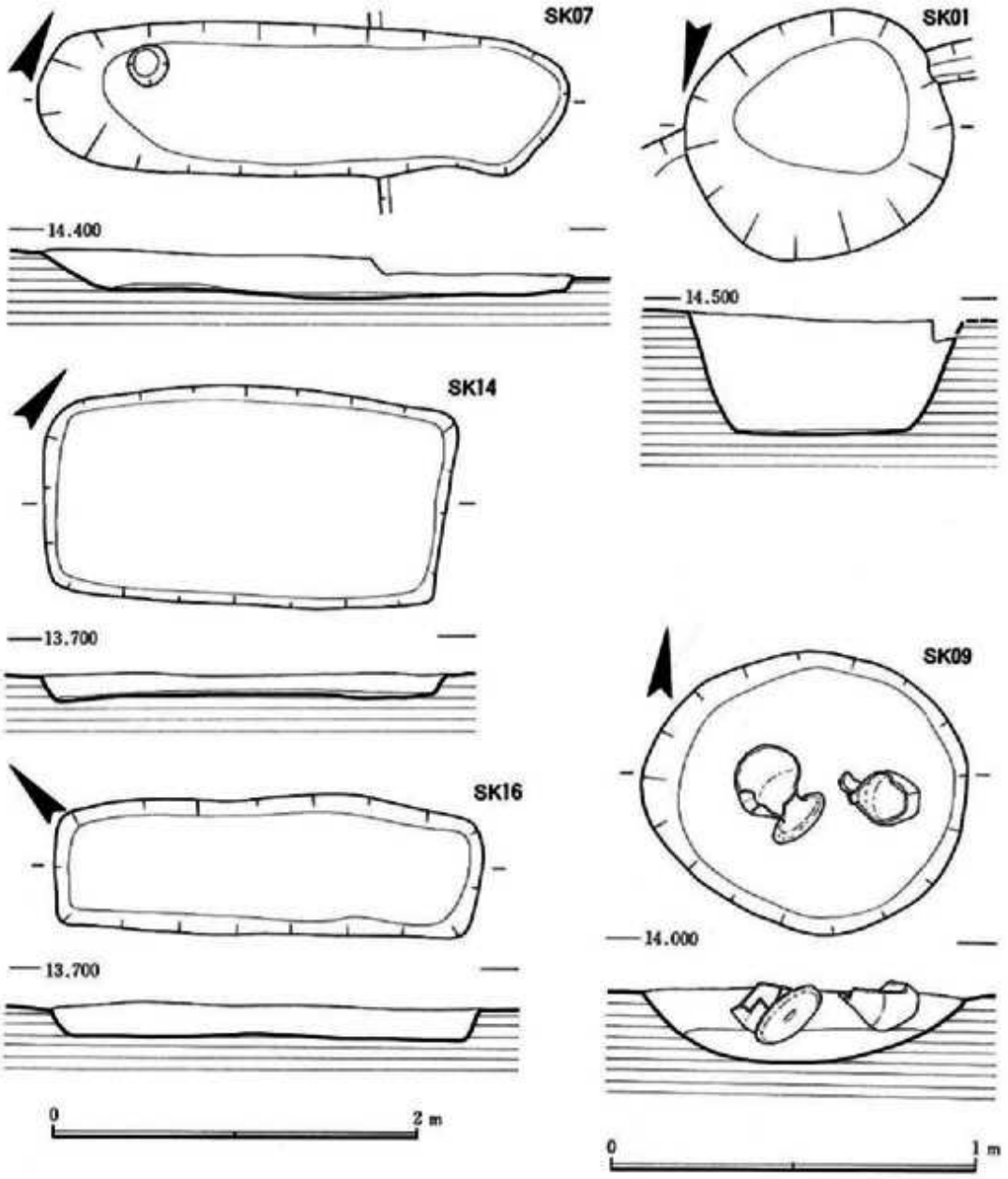
ＳＢ14、15（第４図）　ＳＢ12の埋土中に掘り込まれた住居跡で検出時には確認できなかった。床面の一部、出土土器等で住居跡として確認されたが、切り合い関係は不明である。

(2)　土坑

Ⅰ区に25基、Ⅱ区に１基の計26基の土坑が検出された。用途や形状の不明確なものが多い。

第２表　土坑一覧表

遺構番号	平面形	規模(cm)			出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			
01	円形	140	130	57	土器片	弥生時代中期	
02	円形	90	90	13			
03	円形	80	70	8	土器片	弥生時代中期	
04	隅丸長方形	70	40	21	土器片	弥生時代後期	
05	不整方形	180	170	27	土器片	弥生時代中期	
06	長円形	130	90	18	土器片	弥生時代中期	
07	隅丸長方形	280	80	19	土器片　砥石	弥生時代後期	
08	不整形	120	80	17	土器片	弥生時代後期	
09	円形	90	80	38	土器：壺	弥生時代中期	
10	隅丸長方形	130	60	16	土器片	弥生時代後期	
11	隅丸長方形	130	70	4			
12	不整円形	100	90	13	土師器片	室町時代	
13	隅丸長方形	130	60	18			
14	長方形	220	60	14	土器片	弥生時代中期？	墓の可能性有り
15	長方形	240	90	20	土器片	弥生時代？	墓の可能性有り
16	長方形	230	80	19	土器片	弥生時代	墓の可能性有り
17	隅丸長方形	220	90	17	土器片	弥生時代後期	墓の可能性有り
18	不整形	120	70	19	土器片	弥生時代後期	
19	隅丸長方形	140	80	11			
20	不整形	270	70	24	土器片	弥生時代前期	
21	隅丸長方形	160	60	8	土器片	弥生時代中期	
22	隅丸長方形	170	90	14	土器片	弥生時代中期	墓の可能性有り
23	隅丸長方形	170	100	20	土器片	弥生時代中期	墓の可能性有り
24	隅丸長方形	220	60	25			墓の可能性有り
25	隅丸長方形	160	60	21			墓の可能性有り
26	円形	90	90	38			



第10図　土壙実測図

概要については、第２表（土坑一覧表）にまとめた。出土遺物はＳＫ12を除いて弥生時代である。したがって、他も状況からしてＳＫ12を除き弥生時代の土坑と思われる。形状・規模等から墓である可能性をもつものがいくつか存在する。

ＳＫ07（第10図、図版７）　西端に柱穴状のピットが１つみられるが、整合性はなく用途も不明である。ＳＢ16に切られている。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

ＳＫ14（第10図）　Ⅰ区南にＳＫ18を囲むように検出された５基のうちの１基である。かなりの削平を受けているが、床面が平坦で整った形状をしており墓の可能性もある。埋土は黒褐色粘質土の単層であるが、ブロック状に黄褐色粘質土が混入している。

ＳＫ16（第10図）　床面は比較的平坦である。墓の可能性もある。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

ＳＫ01（第10図、図版７）　ＳＢ02に切られたものであり、用途としては貯蔵用土坑と考えられる遺構である。弥生時代中期前半の土器片を多く出土した。埋土は黒褐色砂質の単一土である。

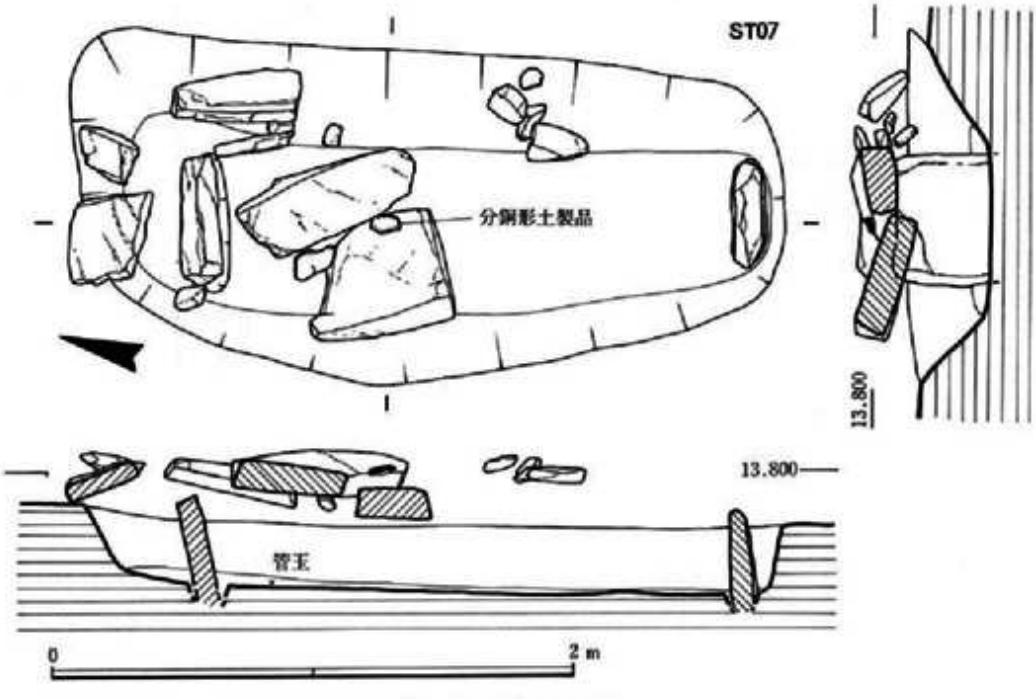
ＳＫ09（第10図、図版７）　浅いすり鉢状の断面形である。復元可能な弥生中期の壺２個体（第15図、図版10）が底面から出土した。貯蔵用土坑の可能性がある。埋土は黒褐色粘質の単一土である。

(3) 墓

土坑墓３基・石棺墓２基・土器棺墓９基・土器蓋土坑墓１基がある。これ以外にも、土坑としてあつかったものの中には、墓の可能性を有するものが数基含まれる。ここでは、明らかに墓と考えられるものについて紹介する。なお、副葬品を有する墓はＳＴ07・ＳＴ10・ＳＴ08の３基のみである。

ＳＴ07（第11図）　標石を伴う土坑墓である。墓坑は長軸267cm・短軸129cm・深さ30cmであり、妻石をもつ。標石・妻石はすべて緑色の塩基性片岩を使用する。標石は２枚の板石を中心としており、墓坑内に落ち込んだ状況が観察された。この２枚の板石の接点付近から折損した分銅形土製品１点（第20図93）が発見された。墓坑・妻石・標石の状況などから、北に頭位をとったと考えられる。墓坑の底面から管玉５本が発見された。

ＳＴ10（第12図）　標石を伴う土坑墓であるが、墓坑を明確に検出できなかった。墓坑規模



第11図　墓実測図①

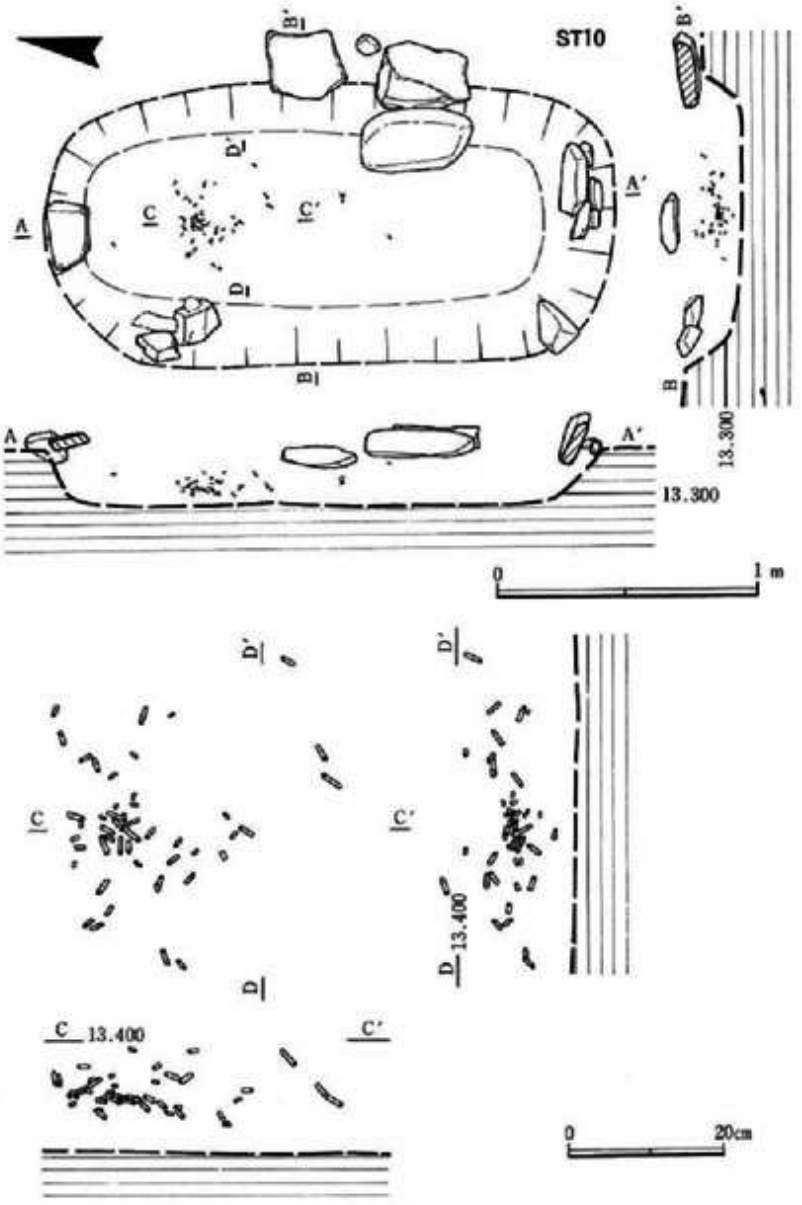
は長軸210cm・短軸110cm・深さ20cm程度と考えられ、南側には妻石を立てる。標石・妻石はすべて緑色の塩基性片岩を使用する。墓坑底面付近からは、総数62本の管玉が発見された。大半は墓坑北寄りの、約40cm四方の範囲に集中しており、弧状に連なった部分があることから、首飾りとして装着されていた可能性が高い。

ＳＴ08（第13図）　標石を伴う土坑墓である。墓坑は長軸216cm・短軸100cm・深さ33cmであり、板状の標石と、その上に集積された拳大の礫が墓坑内に落ち込んだ状況が観察された。標石のうち、南北両端のものが最も大きく、この２枚の板石については妻石の可能性を有する。墓坑北寄りの埋土中層から管玉１本が発見された。

ＳＴ09（第13図）　小型の石棺墓と考えられる遺構である。墓坑は長軸126cm・短軸69cm・深さ15cmであり、３枚の蓋石は墓坑底面近くまで落ち込んでいる。墓坑底面に敷石等は存在しない。石材は花崗岩自然石である。

ＳＴ12（第13図）　石棺墓と考えられる遺構である。開墾に伴う削平によって南半部を失い、蓋石も遺存しなかった。短軸が130cm程度であることを除けば、正確な規模は不明である。妻石・側石は高さが12cm程度であり、ＳＴ09同様に狭い埋葬空間であったと考えられる。墓坑底面に敷石はない。石材は緑色の塩基性片岩である。

第14図（ＳＴ15を除く）は土器棺墓である。棺の在り方から、２個体の甕を合せ口にした



第12図　墓実測図②

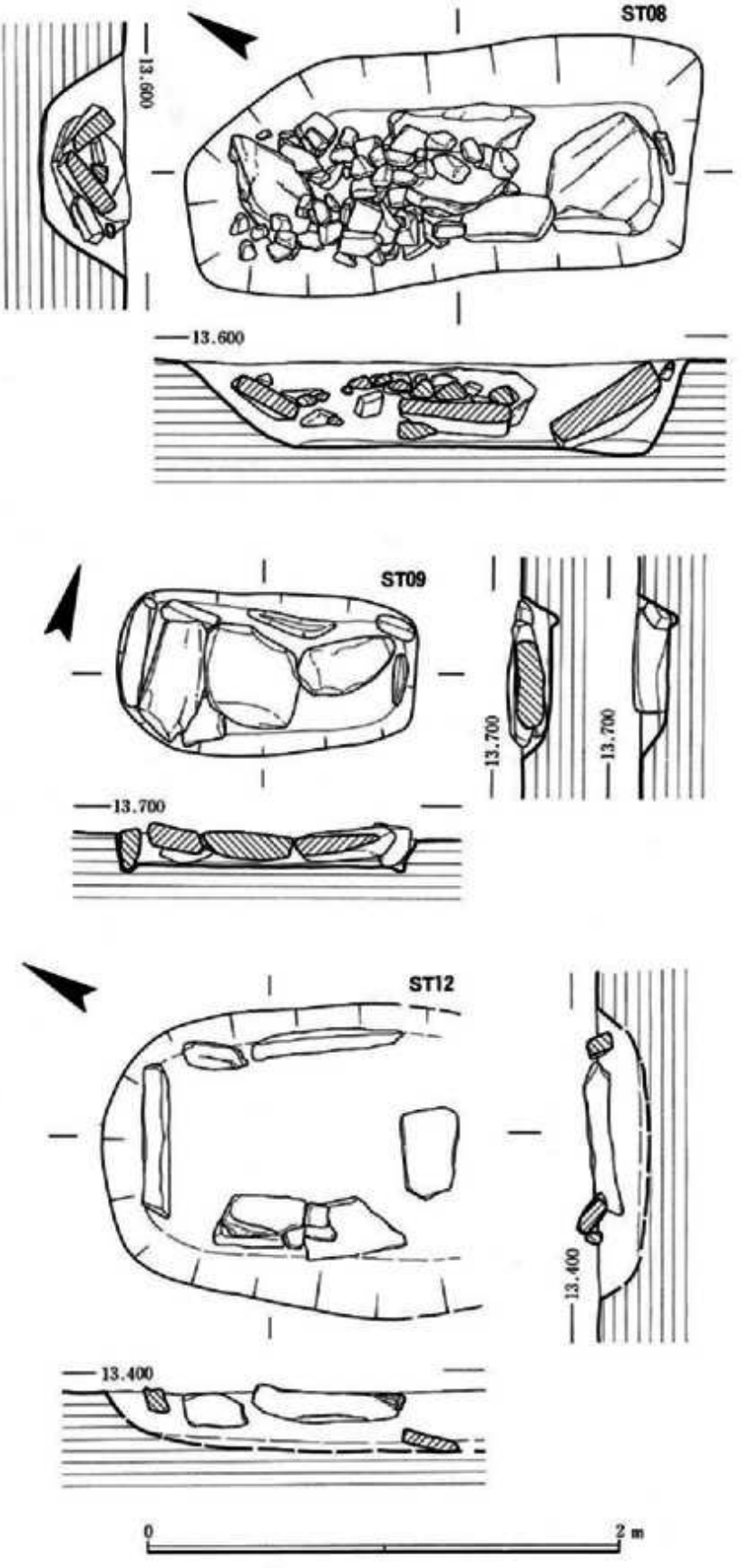
もの（ＳＴ14・05・03）、１個体の壺を棺とし、別の土器を蓋とするもの（ＳＴ04・02）、壺または甕を単独で用いるもの（ＳＴ11・ＳＴ01）がある。

ＳＴ05　２個体の甕を棺とし、接合部周辺には壺・甕各１個体分の土器片で隙間をふさぐ。壺の口頸部が棺の支えに利用される。

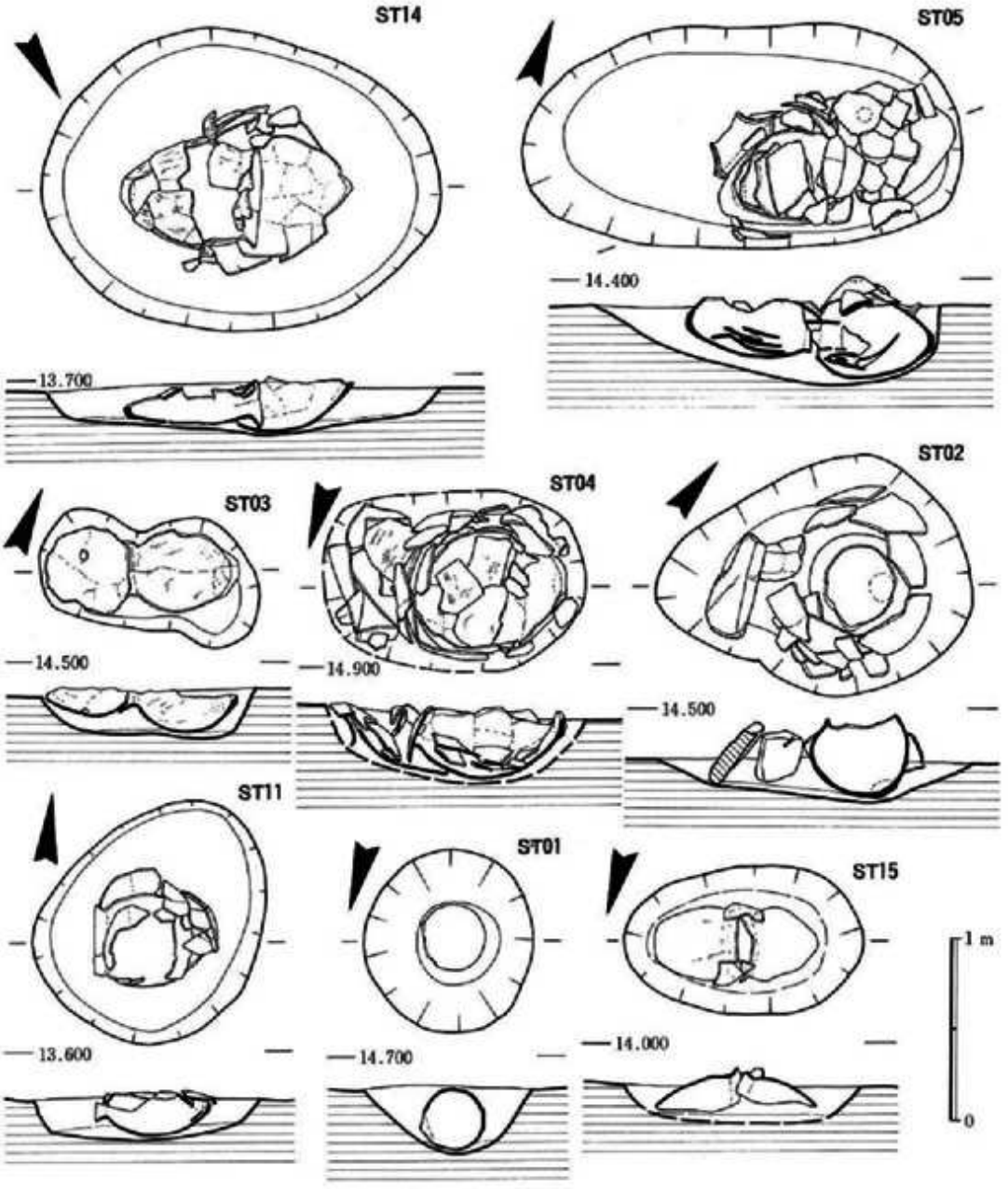
ＳＴ03　西側の甕は口縁部がはずされており、体部中位に焼成後の穿孔が認められる。

ＳＴ02　斜めに置かれた壺に、別の壺の破片が周囲から立てかけられた状態であった。また、墓坑内には板石が添えられている。

ＳＴ15　いわゆる土器蓋土坑墓である。１個体の甕を縦に半裁して伏せ、蓋としたものであり、甕の底部は利用されていない。墓坑底面は不明確で、副葬遺物は存在しない。



第13図　墓実測図③



第14図　墓実測図④

(4)　その他の遺構

溝（ＳＤ１）　Ⅱ区南部に存在する東西方向の溝であり、西端で南にＬ字形に屈曲する。長さ20ｍ、幅60cm～110cm、深さ11cm～15cmを測る。集落内を画するものか水路か等については判断し難い。足鍋、すり鉢、土師器、瓦質土器等の破片が出土したことから築造時期は室町時代の遺構と思われる。

柱穴　Ⅰ・Ⅱ区で検出された柱穴は、総数約400を数える。Ⅱ区の柱穴の埋土は大きく２種類あり、黒褐色砂質土と明褐色弱粘質土である。時期は中世が大部分をしめるが、弥生時代のものもあると推測される。また、溝に対して平行、垂直に並ぶ柱穴群は認められず、溝と同一

時代のものである可能性は少ない。その多くは掘立柱の建物を構成していたものと思われるが明確に建物として復元し得る例はなかった。

その他　Ⅱ区は、中央部から南東にかけては、包含層が厚く堆積しており弥生～古墳時代の遺物を含んでいた。部分的には土器が密集し、折り重なるように出土したところもあった。掘り方が検出されず包含層中の遺物として処理したが、中世の遺構の可能性もある。

Ⅳ　遺物

土器・石器・土製品・石製品・鉄器・鉄製品・玉類などがある。

(1)　土器（第15～18図）

縄文時代晩期～中世の土器がある。このうち、中心となるのは弥生時代中期～古墳時代中期の土器である。ここでは、良好な一括資料と判断できるものを中心として紹介する。なお、中世遺物は少量であり、小破片が多いためここでは割愛した。

ＳＫ01（第15図１～７）　２は壺の肩部に櫛描による横線文・山形文と、刺突文が施された例である。３は壺の肩部に、貝殻腹縁による重弧文と縦長の紡錘形文様が施された例である。後者は５にも認められる。５は色調・調整などから同一個体と判断できる個体を図上復元したものである。

ＳＫ09（第15図８・９）　２個体とも外面はハケ調整ののちにヘラ磨きを施す。ヘラ磨きは体部下半に横方行に施すのを基本とするが、８では体部上半は縦方行のヘラ磨きがみられ、９では体部上半にヘラ磨きを施さない。８は遺存する口縁端部には装飾は認められない。

ＳＢ02（第15図10・11）　鉢・甕とも、内面はヘラ削りののちに口縁部付近のみハケおよびナデによって調整する。

ＳＢ22（第15図12～14）　12の外面はハケののちヘラ磨きを施すが、体部中位のみ横に、他は縦に行う。14は赤色顔料を詰めた状態で、住居跡の周溝から発見された。

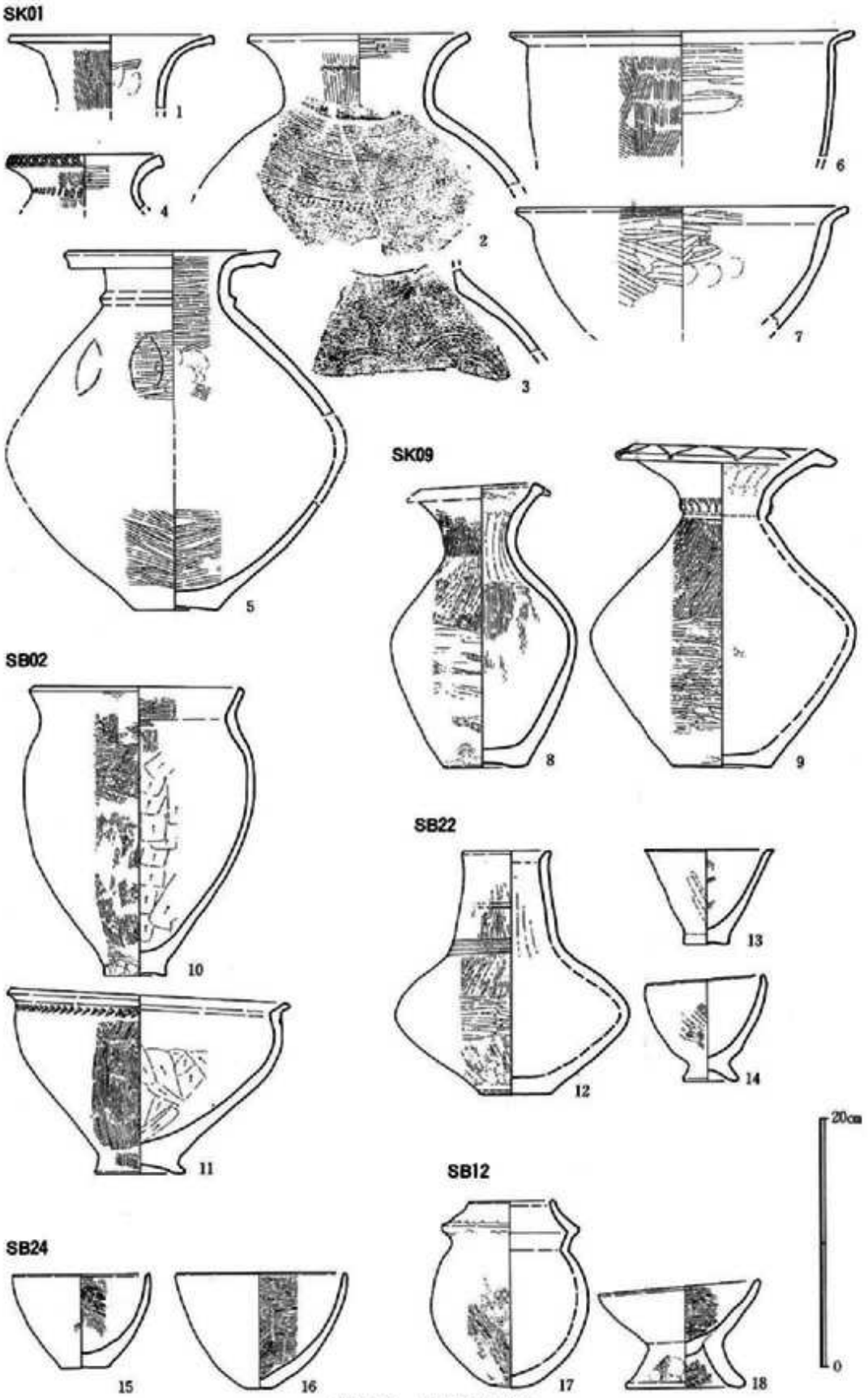
ＳＢ12（第15図17・18）　17は、甕を複合口縁化した形態である。18は、いわゆる円盤充填法によって成形される。

ＳＢ13（第16図19・20）　19は、口縁部外面にヘラによって鋸歯文を施すが、一部は複合鋸歯文となっている。また、櫛描き波状文を消した痕跡も認められる。20は内面にヘラ削りの痕跡をとどめる。

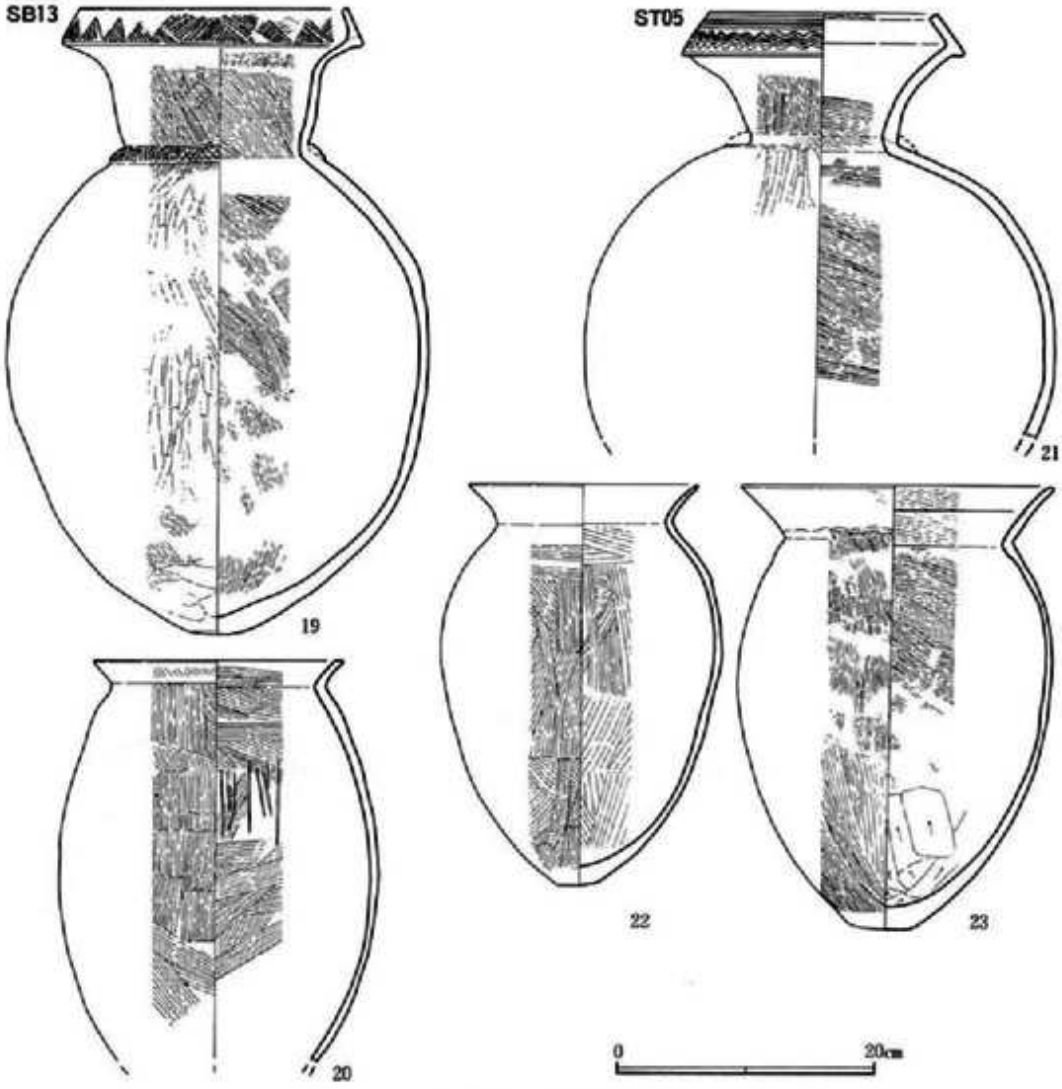
ＳＴ05（第16図21～23）　壺・甕とも内外の調整はハケを基本とするが、23はヘラ削りを内面の一部に残す。図示したもの以外に甕１個体が共伴した。

ＳＢ17（第17図24～33）　24は口縁部外面に放射状の暗文を施す。33は外面に丹塗りが認められる。この住居からは、破片ながら10個体以上の土師器高杯が出土したが、円錐形の脚部をもつものは32のみである。

ＳＢ32（第17図34・35）　34の外面にはヘラ磨きが認められ、脚部は６方向に円形透しをも


SK01
1
2
3
4
5
6
7
SK09
8
9
SB02
10
11
SB22
12
13
14
SB12
17
18
SB24
15
16
20cm
0

第15図　土器実測図①



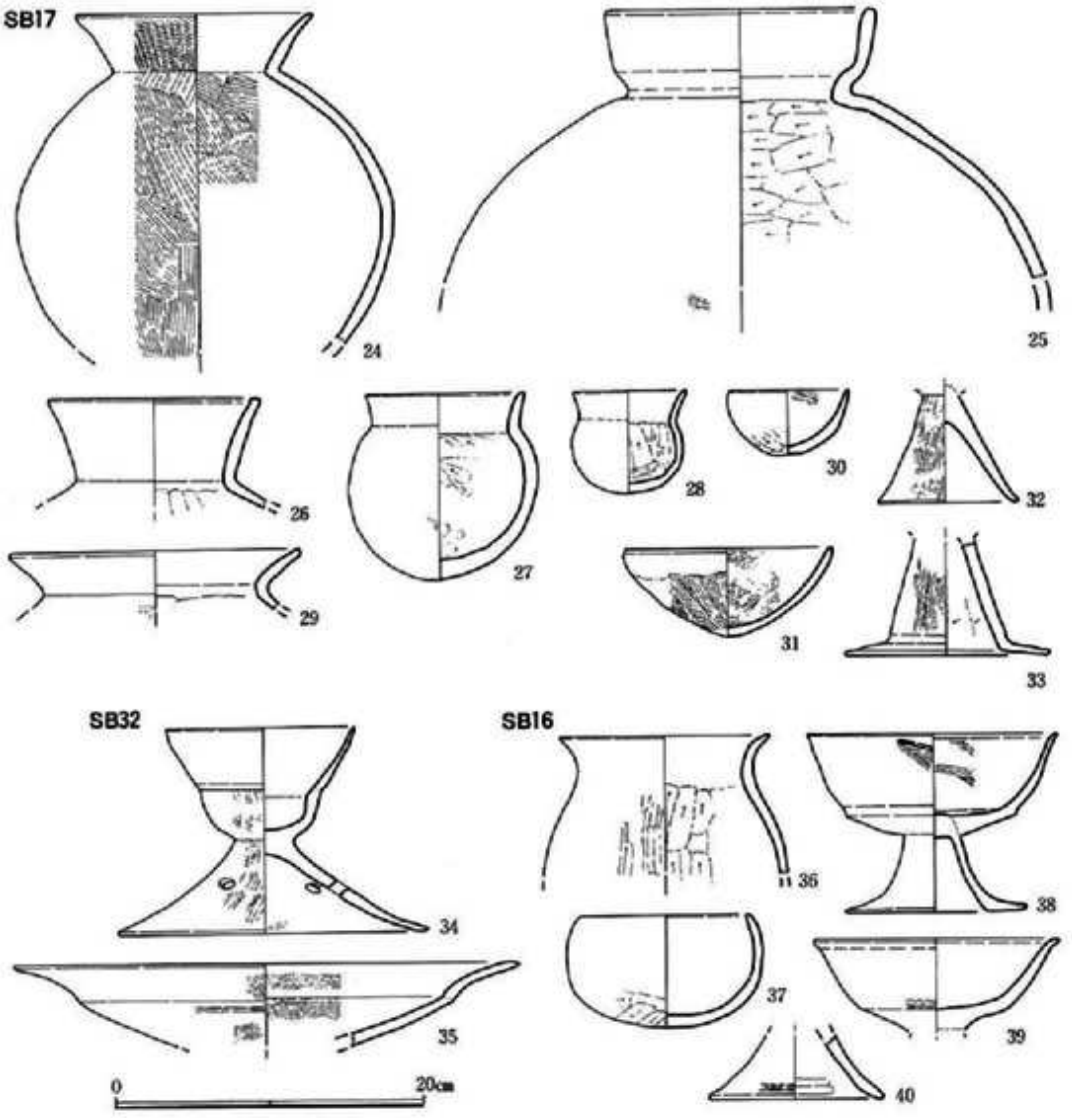
第16図　土器実測図②

つ。35は口縁部内面に放射状の暗文を施す。

ＳＢ16（第17図36～40）　住居跡の壁沿いに並べた状態で遺存した土器である。

その他の土器（第18図41～57）

41～43は縄文土器であり、42・43の傾きは推定によるものである。いずれも内外面に条痕がみられる。44はＳＫ20から出土したものであり、８条の沈線と刺突文が施される。45の頸部には横位のハケが装飾的に施される。46・48・49は同一地点の包含層中から出土した壺・甕であり、いわゆる山陰系土器である。47は底部外面の中央に直径１㎝程のくぼみをもつ。50はやや大型の高杯脚部である。円形の透しがおのおの４方向に２段に穿たれる。51は弥生土器鉢であり、低い脚部を貼り付ける。56は柱穴内に据えられた状態で遺存した器台である。筒部には、上段４方・下段３方の円形の透しが穿たれる。器面の調整等は不明である。なお、41～43、46・48・49・51は遺物包含層からの出土である。



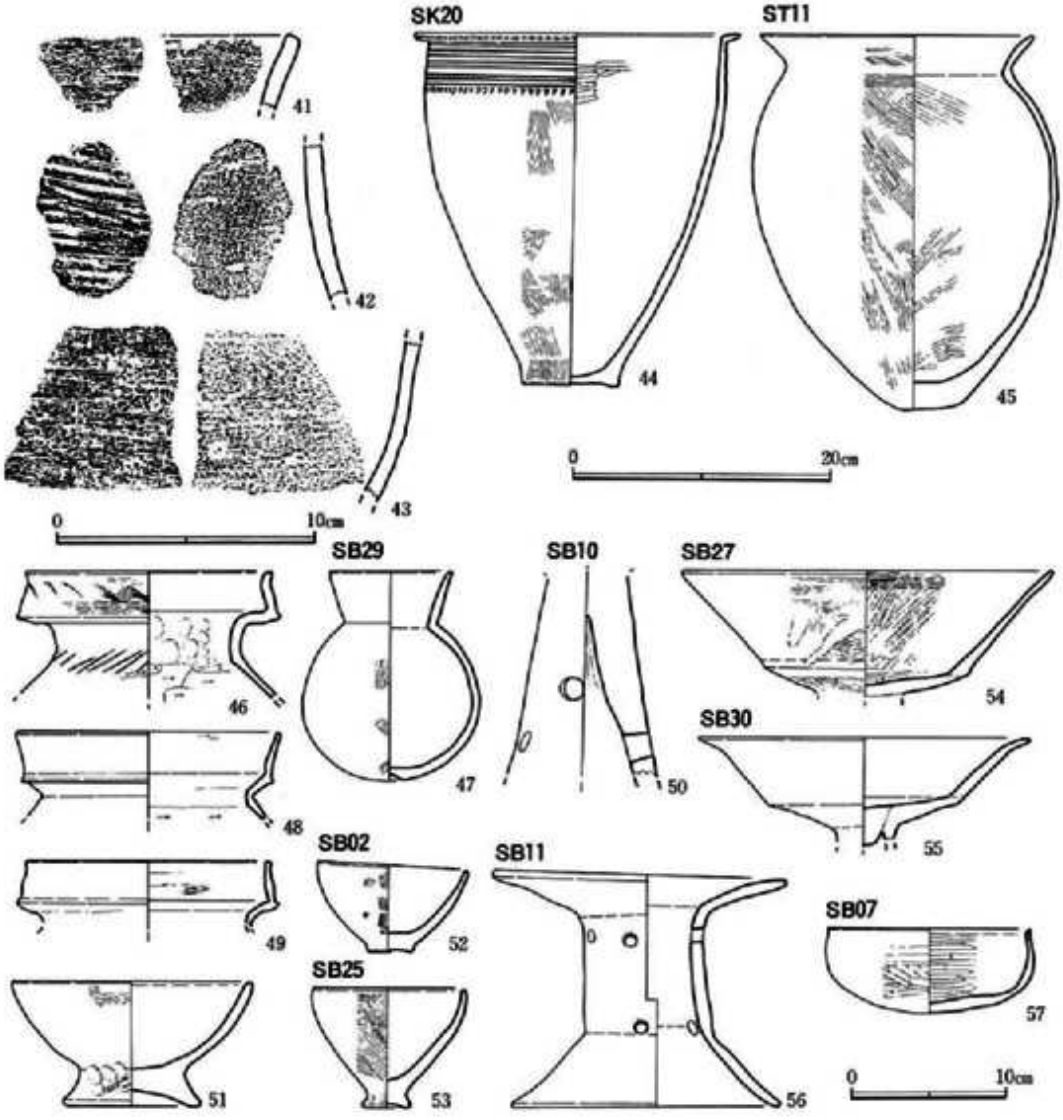
第17図　土器実測図③

(2)　石器・石製品（第19図）

石鏃・石錐・石錘・石斧・砥石等がある。

58～60は石鏃未製品であり、61～67は製品である。石材は58～65は安山岩、66は赤色のチャート、67は姫島産黒曜石であり、67は打製ののち先端部を研磨する。58～64は同一の住居跡（ＳＢ09）埋土からの出土である。68・69は石錐である。68は安山岩製で打製あり、69は砂岩の自然石を利用する。70・71は円礫の両端を打ち欠いた石錘である。72は安山岩製の紡錘車である。72は小型の扁平片刃斧である。74は円礫を利用した叩石である。75は柱状片刃石斧であり、折損している。76は太型蛤刃石斧である。完形であるが、使用による刃つぶれが顕著である。77は石庖丁である。折損品であるが、２孔をとどめる。石材は頁岩である。

78～80は砥石である。時代に関係なく多くの住居から出土しており、石材は泥岩・凝灰岩・花崗斑岩などが利用される。



第18図　土器実測図④

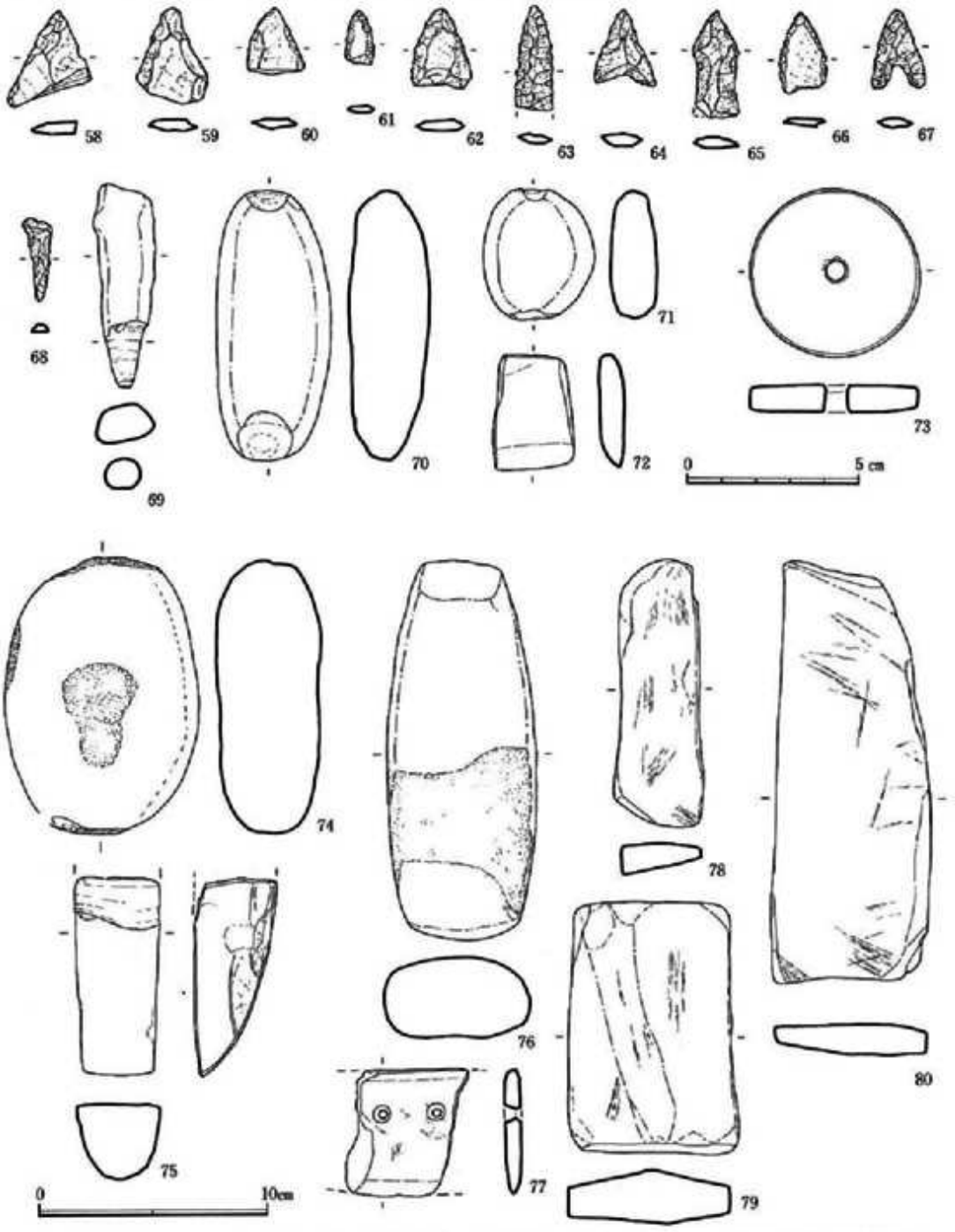
今回出土した石器のうち、最も個体数が多いのは石鏃であり、遺構に伴わないものを含めて200個を超える（製品・未製品・折損品の総計）。このうち、最も多くの石鏃関連遺物が出土した遺構はＳＢ09（弥生時代後期後半）であり、この住居跡については使用石材の構成比率を知るため、埋土をすべてふるいにかけた。その結果、完形品17点・折損品28点・未製品40点の石鏃と、安山岩664ｇ・姫島産黒曜石259ｇ・石英４ｇ・チャート２ｇ・黒色黒曜石１ｇの剥片を得た。なお、石鏃および剥片の多くは床面から遊離した状態での出土である。

(3)　土製品（第20図）

ミニチュア土器・土錘・勾玉・分銅形土製品などがある。

81～85はミニチュア土器であり、甕・鉢・高杯などを模したものである。86は形状不明の土製品である。87～89は土錘である。円柱形・紡錘形・長紡錘形の３タイプがあり、いずれも側面に溝を有する。量的には紡錘形のものが最も多い。90は支脚と考えられる。91は算盤玉状の

土製品であり、直径2㎜の孔を有する。92は土製勾玉である。やや大型品であり、指頭痕を多く残す。93・94は分銅形土製品である。93はやや大型で、表面にヘラ磨きを施し、赤色顔料の付着が認められる。94は表面にみられる細く浅い沈線状のくぼみがみられ、顔を表現したものである可能性を有する。側面下端は破損しているものの、片側に4つ以上の穿孔が認められる。



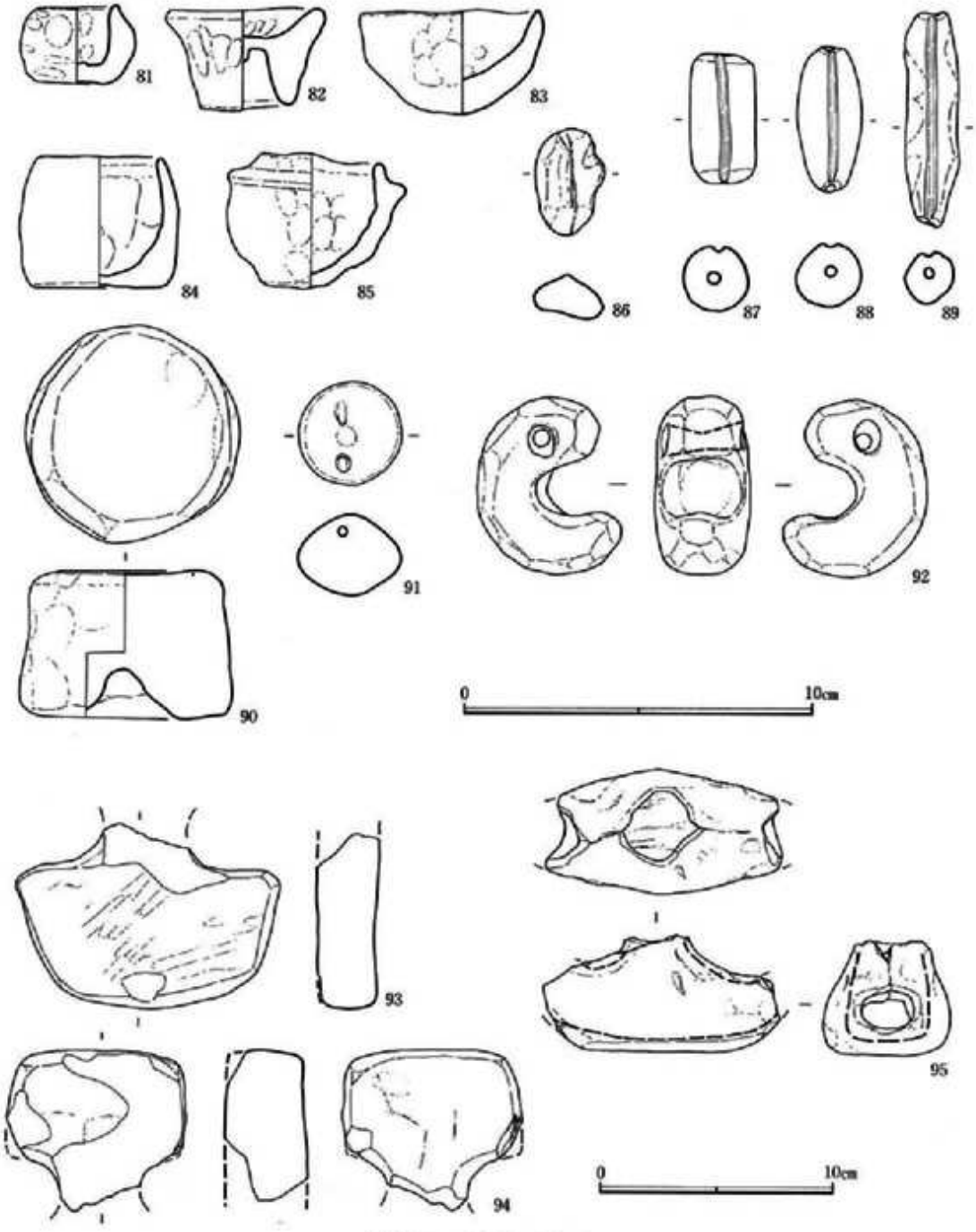
58～64・68・69：SB09、65・66：SB20、67：包含層、70：SB05、71：SB30、72：SB12、73：SB25、74：SB02、75：SB16、76：SB34、77：SB10、78：SB33、79：SB23、80：SB02

第19図　石器・石製品実測図

95は異型の土製品である。端部は欠失するものの、上端は原形をとどめる。板状の粘土を上方で接合して成形しており、内面にはシボリ痕が多くみられる。皮袋形土器の一種と考えられる。

(4) 鉄器（第21図）

96は鉄鏃である。住居跡床面から発見されたものであり、定角式に属する。97は石突状鉄器である。鉄板を長円錐形に加工したものであり、最大径は1.0cmである。98は完形の鉈である。刃部はやや短い。



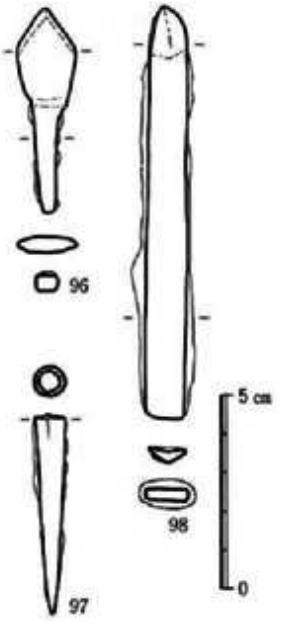
第20図　土製品実測図

(5) 玉類（第23図）

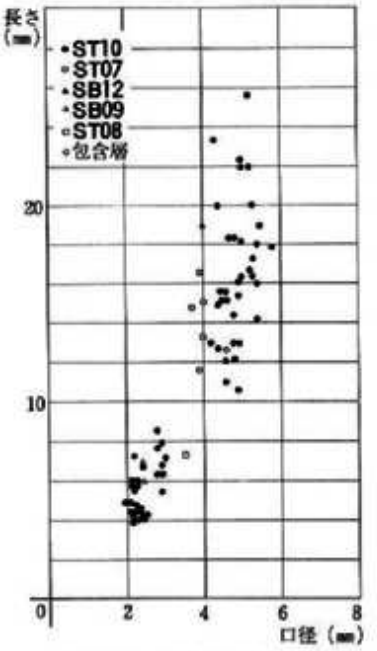
管玉・ガラス小玉がある。

管玉は総数78本出土したが、このうち62本はＳＴ10から出土した。これらの管玉は、長さと直径の関係によって大小２群に分かれる（第22図）。穿孔については、大型のものは両面穿孔であるが、小型のものは両面穿孔・片面穿孔の両者がみられる。

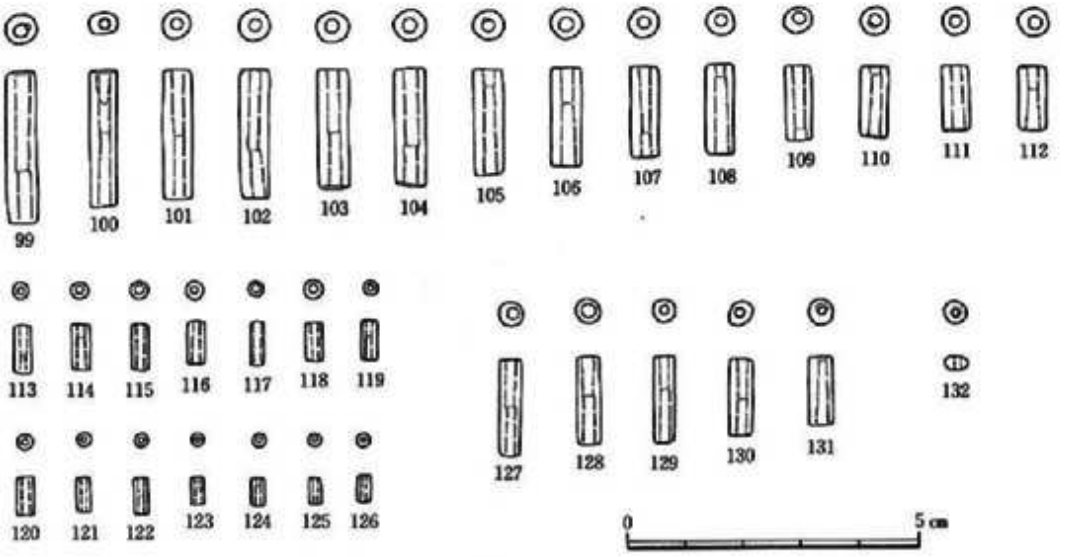
なお、ＳＴ10から出土した管玉の総延長は約73cmであり、一連の首飾りを構成していたと考えられる。しかし、勾玉を持たないこと、明らかに大小２種類で構成されることなどから佐賀県・吉野ケ里遺跡で復元されるような額飾りである可能性も考慮すべきであろう。



第21図　鉄器実測図



第22図　管玉法量分布



第23図　玉類実測図

V　まとめ

ここでは、今回の調査成果を整理し、問題点を指摘してまとめとしたい。

遺跡の概要について

明地遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であり、全体では３～４万㎡の広がりをもつと推定される。今回の調査は遺跡の南端（低位部）の、全体の約２割程度の面積を対象としたものであり、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡と、弥生時代の墓地が発見された（第24図）。なお、環濠の有無については確認できなかった。

弥生時代の墓地について

明らかに墓と考えられる遺構は総数15基存在する。土坑墓・石棺墓・土器棺墓・土器蓋土坑墓があり、土坑墓と石棺墓の一部は成人墓、他は小児墓と考えられる。土坑墓・石棺墓は時期不詳であるが、形状・石材の使用法等から弥生時代中期と推定される。これに対して土器棺墓・土器蓋土坑墓は弥生時代後期後半に位置付けられる。

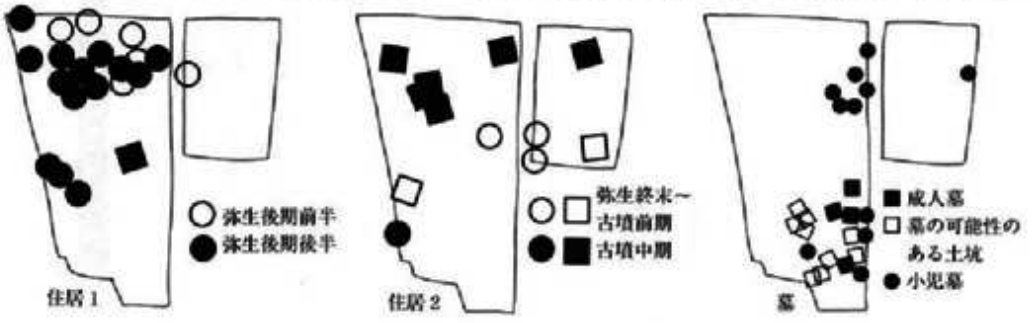
調査区南端に成人墓の集中する一画があり、その周辺には、規模・主軸方向などから墓の可能性を有する土坑が数基存在する。実際には、これらを含めた10基余りによって墓地が構成されていたと考えられる。なお、墓地の周辺には同時期の住居は存在しない。小児墓に関しては近接して同時期の住居があり、墓地を構成するものではないと判断できる。ただし、小児墓ながら、ＳＴ09は例外的に成人墓群中に位置する。

弥生時代の墓で特筆すべきものはＳＴ07とＳＴ10である。前者は分銅形土製品を伴う例であり、分銅形土製品の性格の一面をうかがわせる。後者は62本の碧玉製管玉が出土した例であり、本遺跡で最も顕著な副葬遺物を持つ例である。

時期別にみれば、中期に属すると考えられる墓は成人墓がほとんどであり、副葬品をもつものがあるのに対して、後期に属するものは小児墓に限られ、副葬品をもつものはない。このことは、弥生時代後期に有力者の墓が別の地点へ移動したことを想定させ、この地域の社会的発展の過程をたどるうえで貴重な資料である。

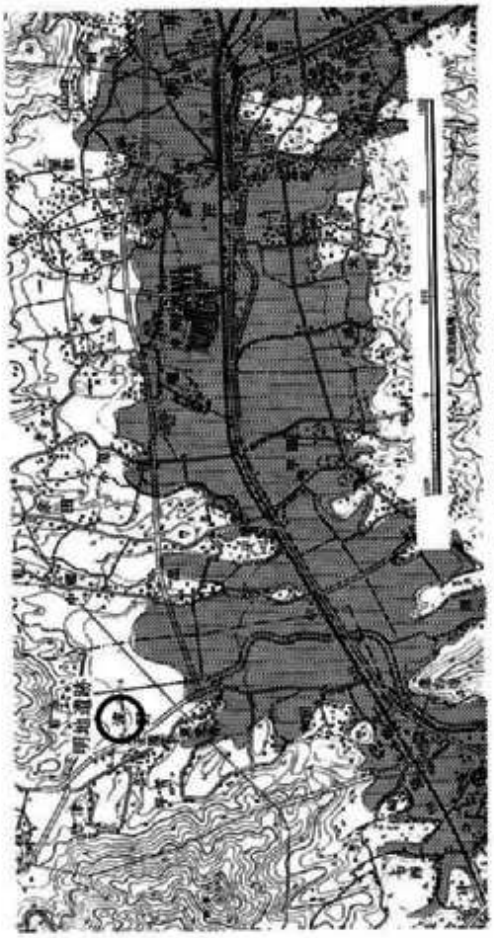
旧海岸線の推定について

今回の調査の期間中に、圃場整備事業に伴う排水溝（第25図参照）の掘削が行われた。この

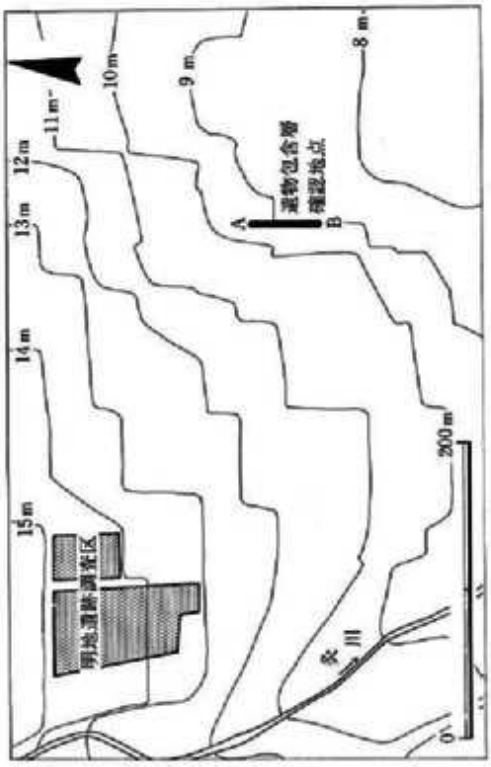


第24図　住居・墓分布模式図

際、弥生時代後期の遺物包含層が確認された（第27図）。遺物包含層は有機物を多く含む湧水層であり、青灰色粘質土にはさまれた状態で堆積する。以上のことから、弥生時代後期には、現標高10mの地点は水面下であったと考えられ、明地遺跡の調査の成果（現標高13mの地点には遺構が存在する）を考慮すれば、現標高10～13mの間に当時の海岸線を想定することが可能である。第25図は、現標高10m以下の範囲をアミ掛けで示したものであり、本遺跡の眼前まで瀬戸内海が迫っており、本遺跡は炙川の河口に立地していたことがわかる。また、遺物包含層確認地点の南方では青灰色粘質土の高まりがみられ、B地点付近が砂洲であった可能性が高い。



第26図　古柳井水道想定図



第25図　明地遺跡調査区と遺物包含層確認地点

第27図　遺物包含層確認地点土層図

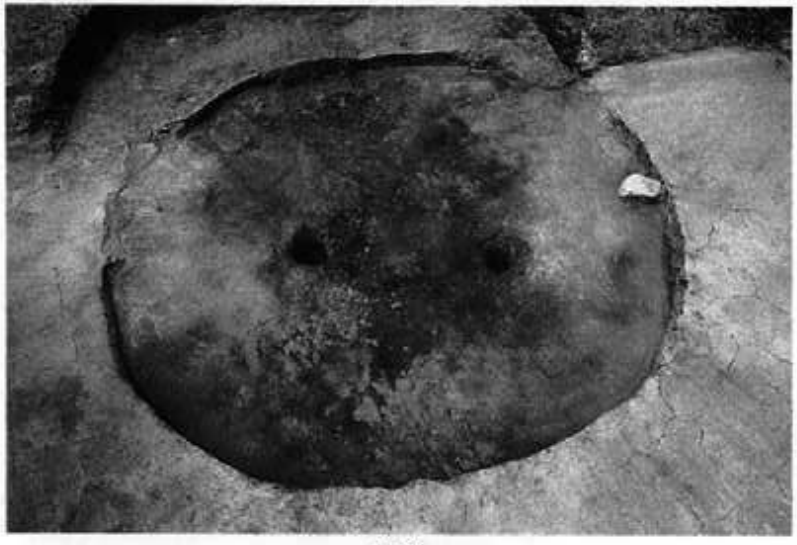
明地遺跡全景（北上空から）

明地遺跡全景（南上空から）

図版 2

遺跡完掘（真上から）

遺跡完掘（住居群）



SB31

SB02

SB22

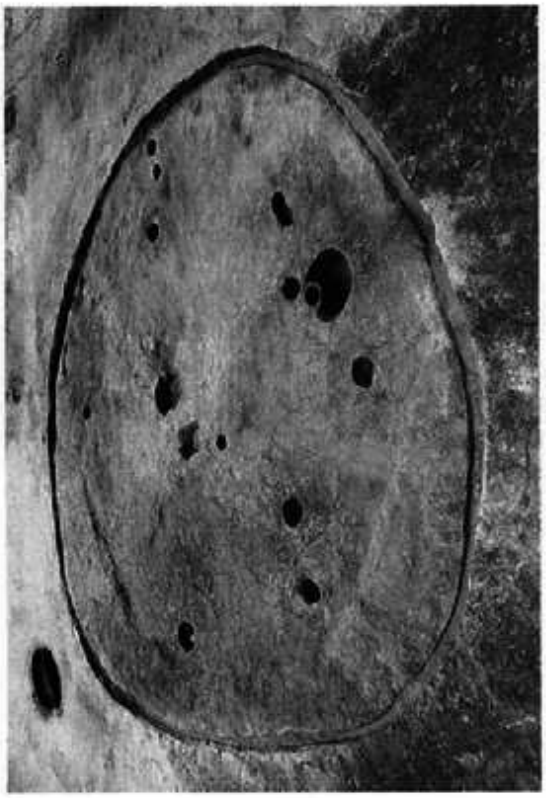
SB21

図版 3

図版 4

SB18

SB13　土器出土状況



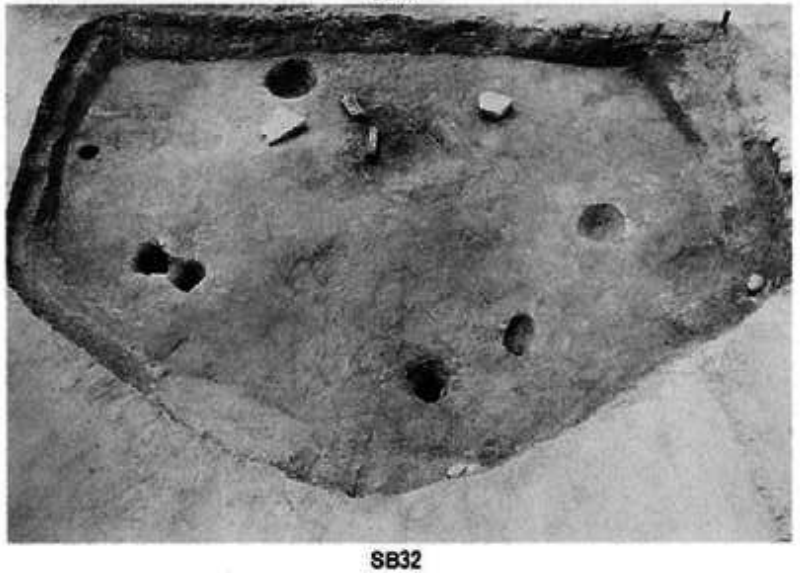
SB09

SB13

SB24

SB27

SB17



SB32

図版5

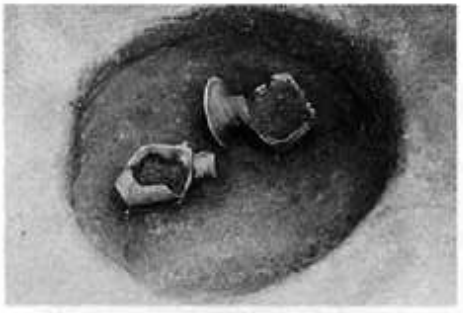
図版 6

SB34 炉跡

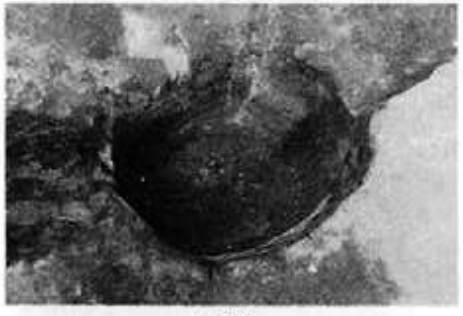
SB30

SB34

SB16



SK09



SK01

SK07

ST07　検出状況

ST07　完掘

ST07　分銅形土製品出土状況

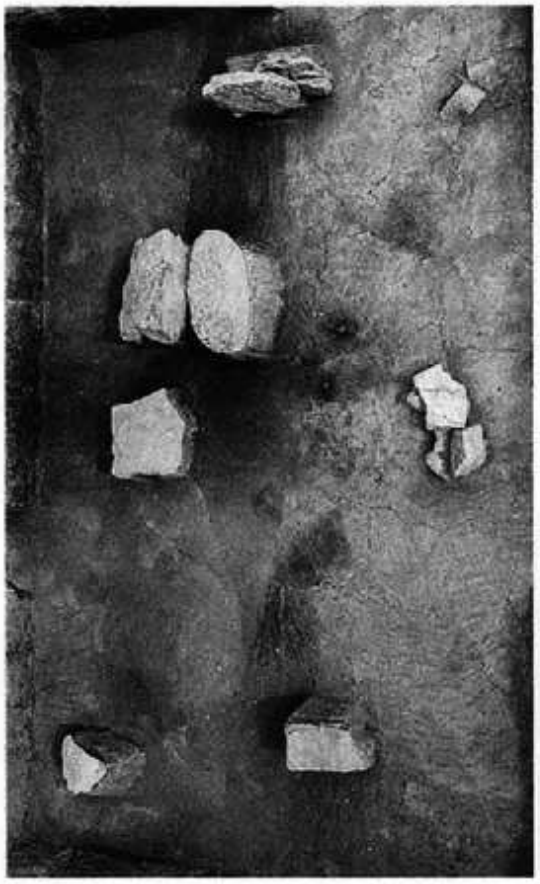
図版7

図版 8

ST08

ST09

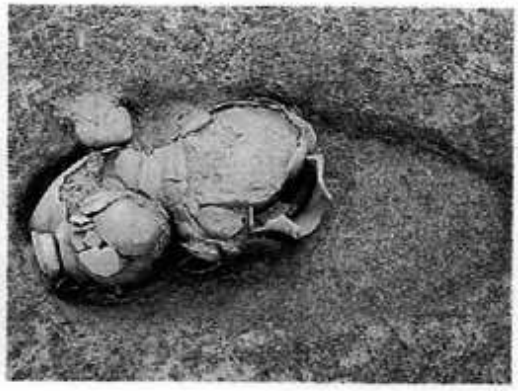
ST12



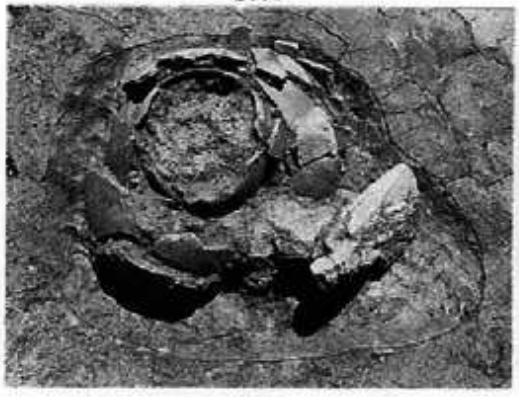
ST10

ST10 管玉出土状況

ST14



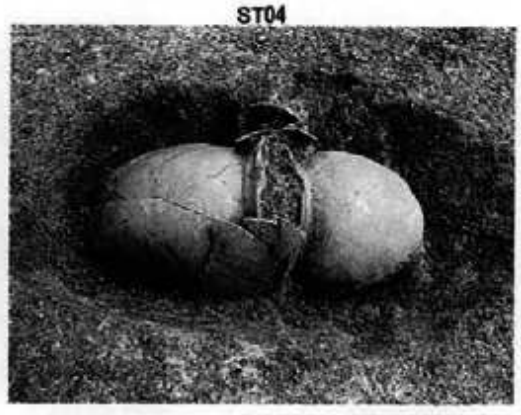
ST05



ST02

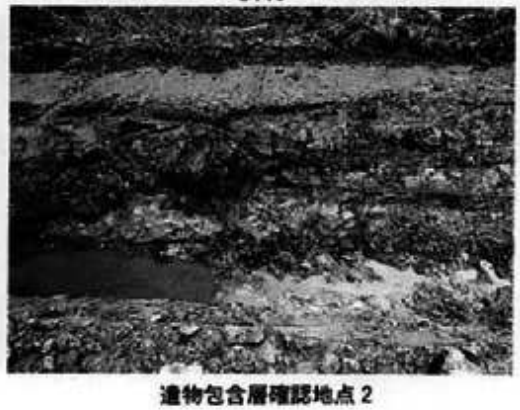
ST04

ST11

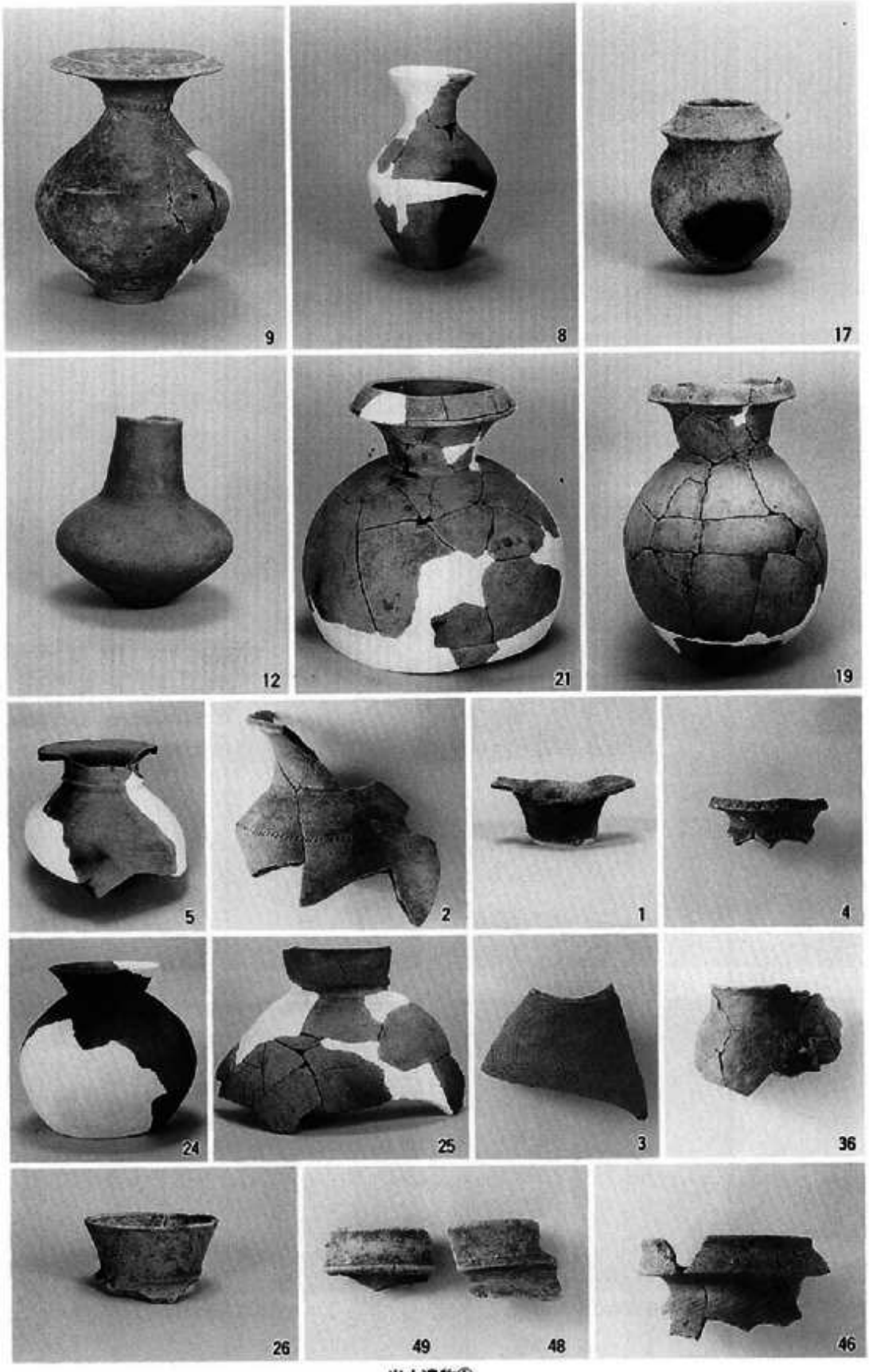


ST15

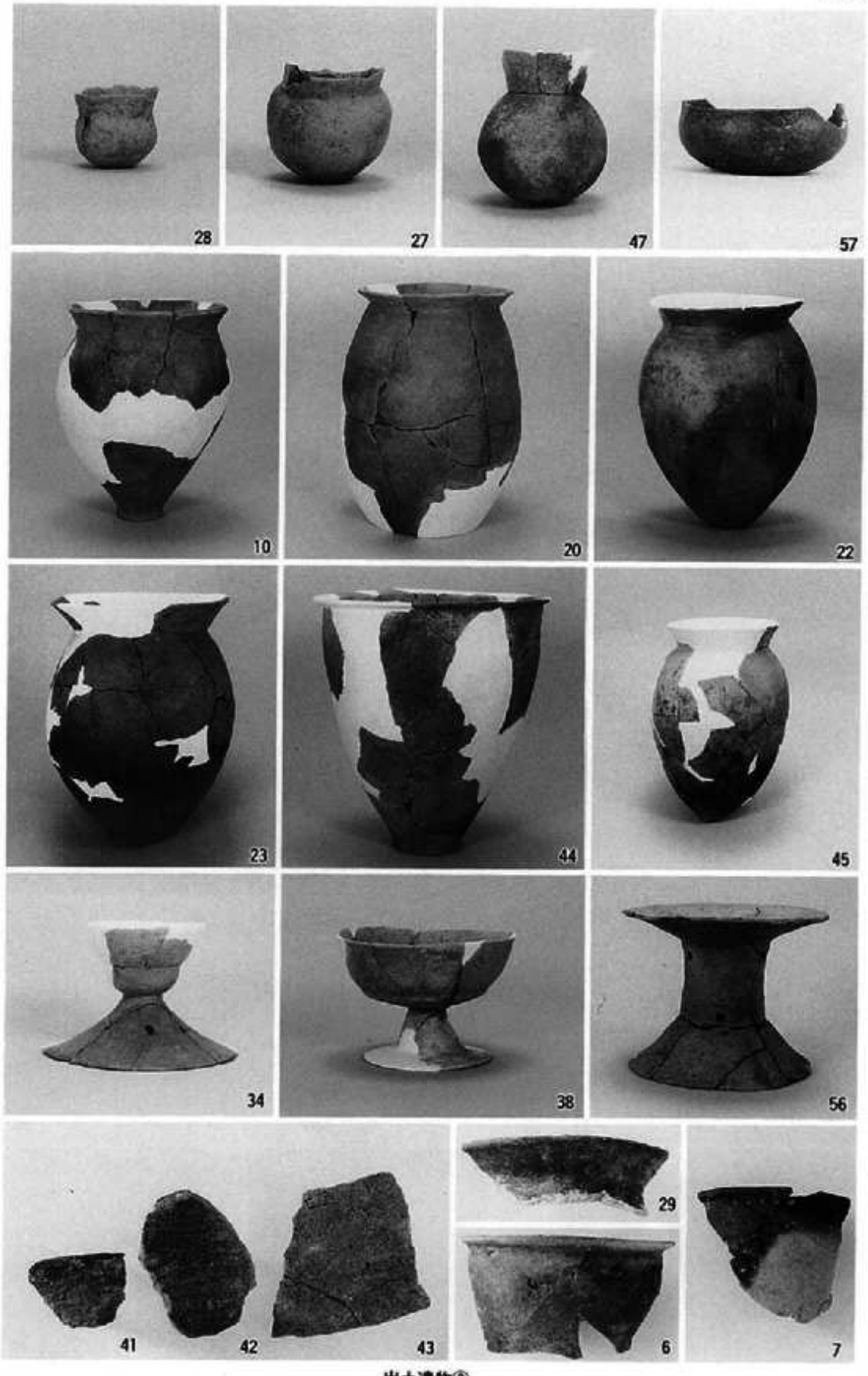
遺物包含層確認地点 1



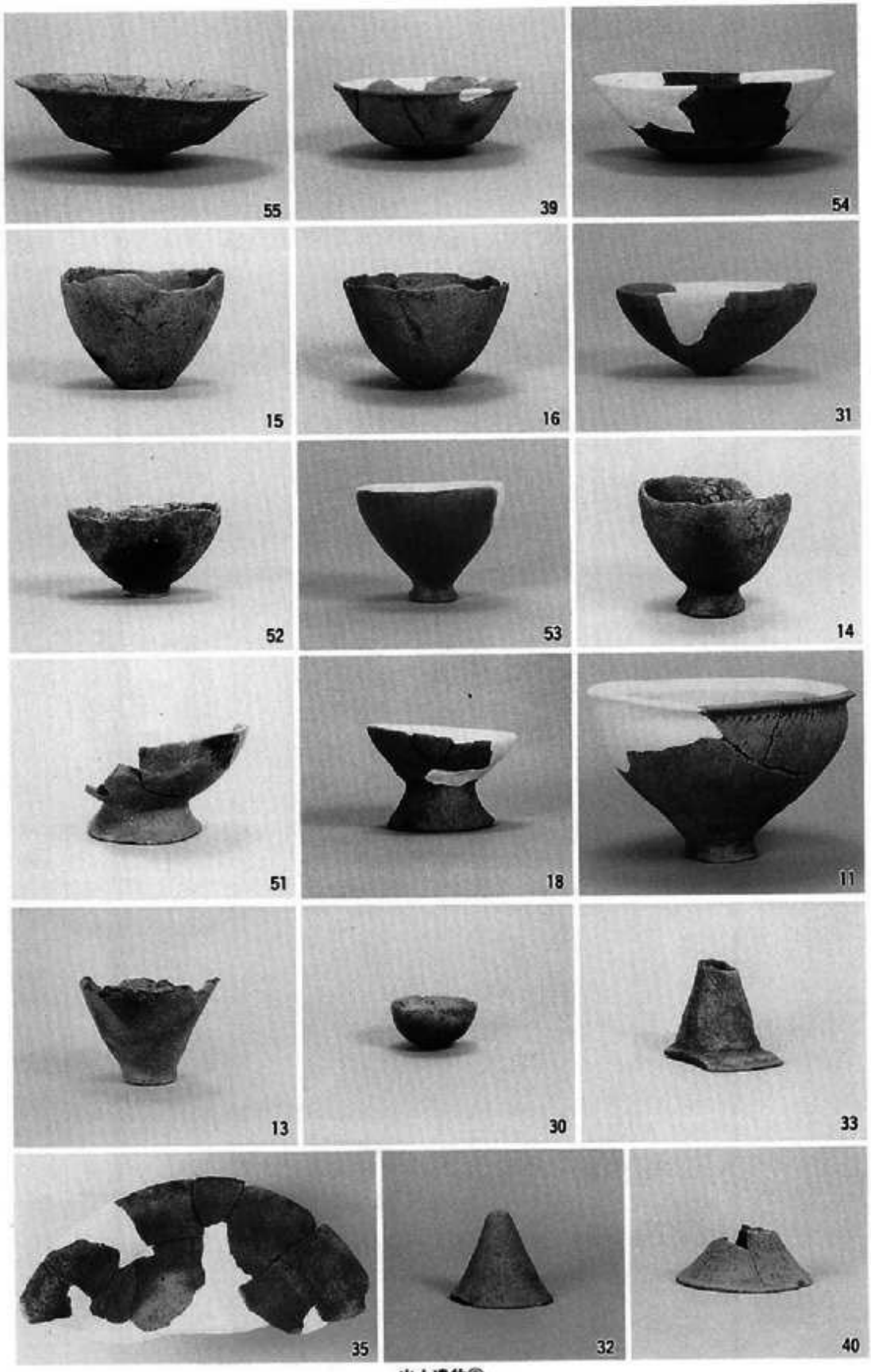
遺物包含層確認地点 2



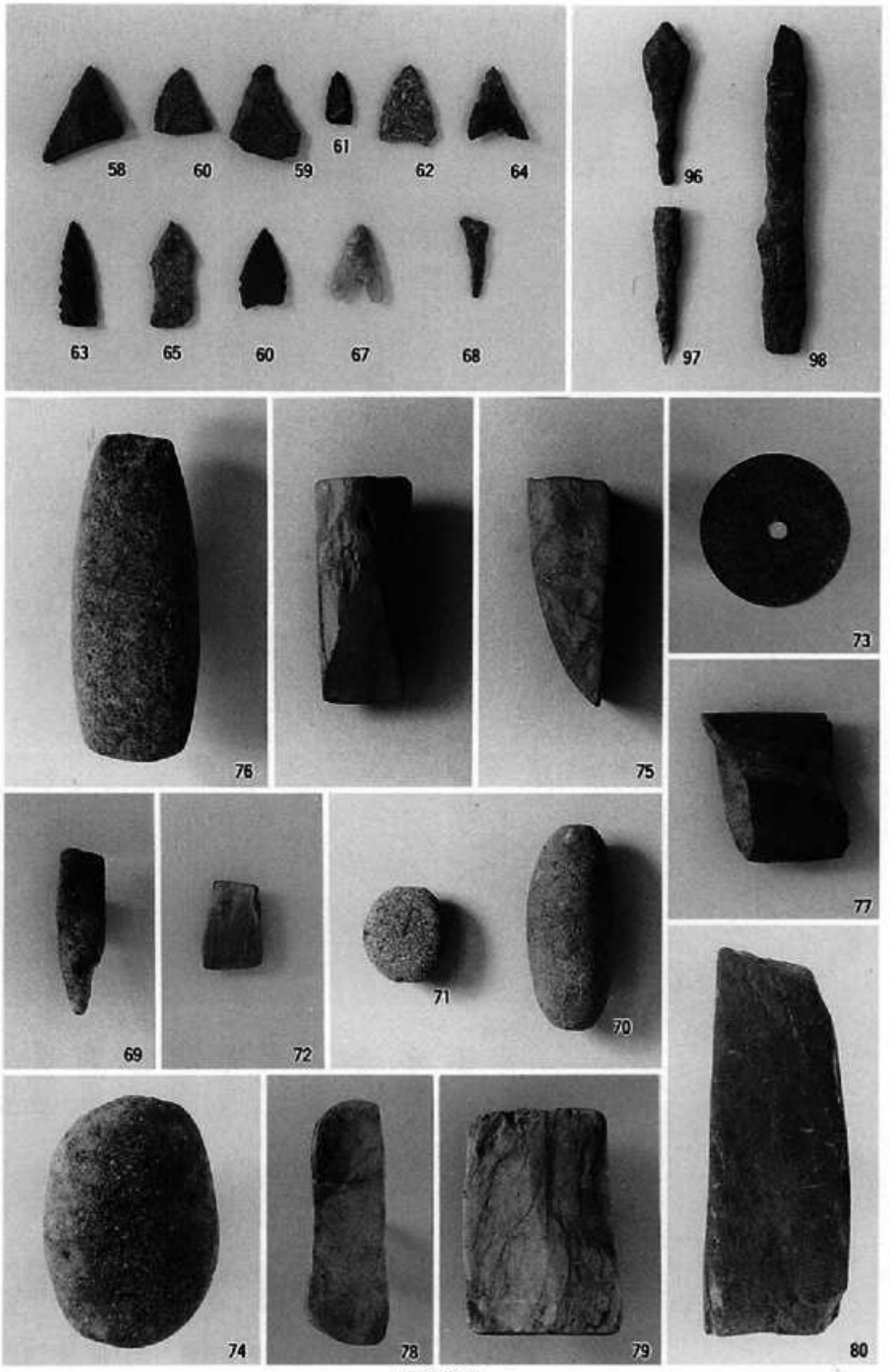
出土遺物①



出土遺物②

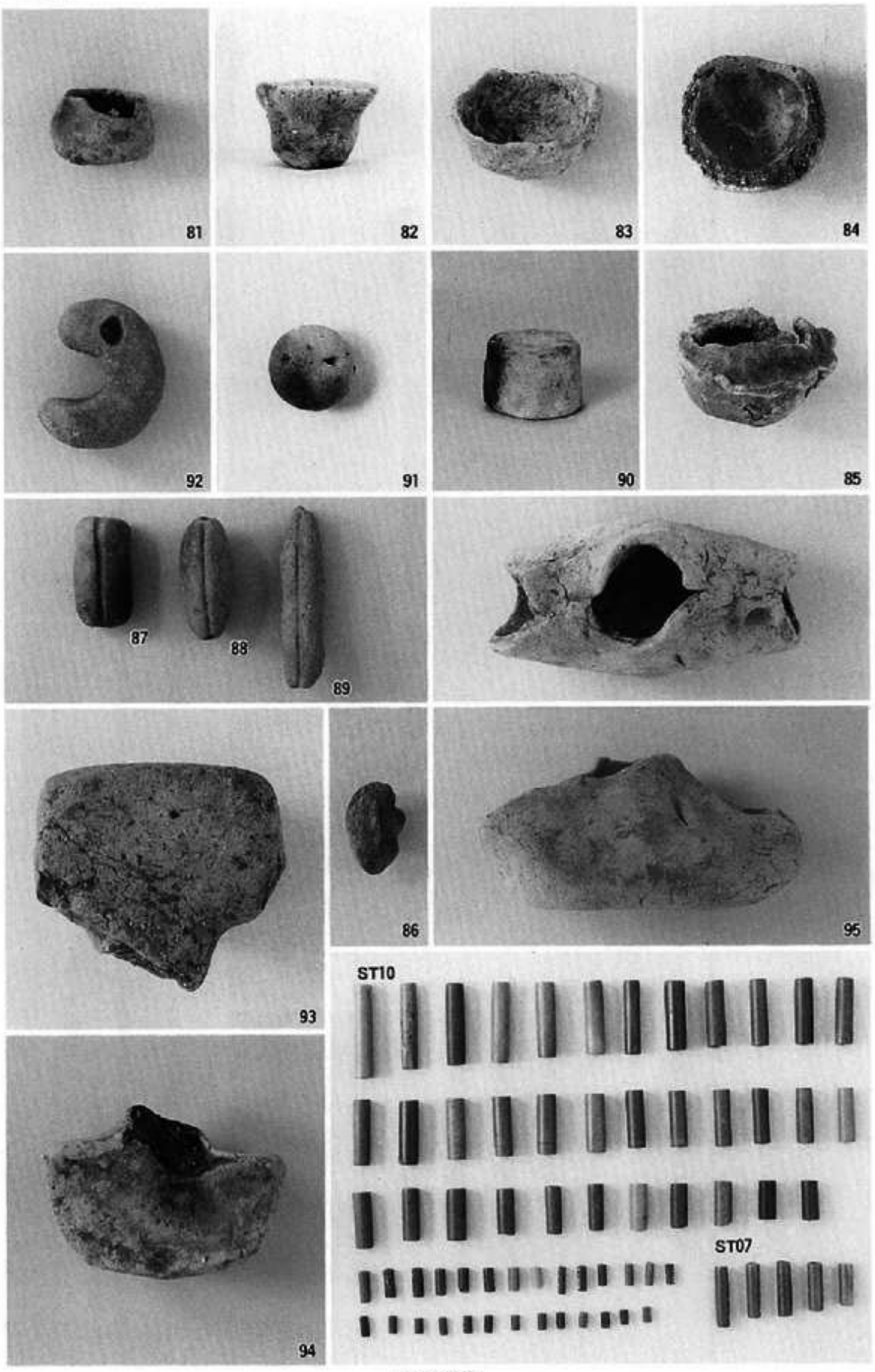


出土遺物③


58
60
59
61
62
64
63
65
60
67
68
96
97
98
76
75
73
77
69
72
71
70
74
78
79
80

出土遺物④

図版14



出土遺物⑤

山口県埋蔵文化財調査報告第162集

明　地　遺　跡

－平成４年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告－

1993年３月

編集　財団法人　山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター
発行　財団法人　山口県教育財団
　　山口県教育委員会
印刷　泉菊印刷株式会社